ス

○外國船乘込規則

明治九年三月十八日第三十號布告

第一條　外國船ニ乘込旅行セントスル者ハ出船當日或ハ一日前其屬籍住所姓名及ヒ何國人所持船何號ニ乘込何港迄趣ク旨ヲ具シタル届書ヲ其出船スル地ノ廳ニ差出シ乘船證書ヲ受クヘシ

第二條　乘船證書ハ一人一枚タルヘシ

第三條　乘船證書ヲ受取ルニハ一枚ニ付手數料トシテ金十錢ヲ納ム可シ

第四條　乘船證書ハ每人親ラ出廳シテ受取ルヘシ代人ヲ以テスルヲ許サス

第五條　乘船證書ハ着港上陸ノ上其地ノ警察官吏ニ返付スヘシ其途中一時上陸（例ヘハ横濱港ヨリ長崎港ニ到ル者其船舶神戸港ニ卸碇シタル時用便タメ暫時上陸スルノ類）スル者其他臨檢警察官吏ニ其證書ノ檢閲ヲ受クヘシ

第六條　乘船證書ハ一度ノ出船ニ用フルモノトス故ニ途中ヨリ上陸スルカ又ハ事故アリテ乘込ヲ止メ更ニ他ノ船ニ乘込カ又ハ同船タリトモ他日航海ノ便ニ乘込ムトキハ最初受取タル證書ハ其出船スル地ノ廳ニ納メ更ニ證書ヲ受取ルヘシ

第七條　乘船證書ヲ所持セスシテ乘船シタル上陸ノ節違式ニ照シテ處分スヘシ

第八條　開港場アル地方廳ニ於テハ外國船ニ乘込ントスルノ届書ヲ差出ス者アル時ハ第一條第四條ノ手續ニ相違ナキヤヲ檢閲シ別紙雛形ノ證書ヲ直ニ本人ニ相渡シ手數料ヲ領收スヘシ

第九條　右地方廳ハ兼テ船場ノ要所ニ於テ警察官吏ノ出張所ヲ設ケ置キ外國船出入港每ニ若干員ヲ臨檢セシメ內國人ノ乘船又ハ上陸スル者ノ證書ヲ一々檢閲シ若シ証書ヲ所持セサルカ又ハ其證書最前ノ出船ニ請取タルヲ其儘再用シタルヲ視認メタルトキハ詳カニ其所由ヲ取糺シ證書所持セサル者ハ乘船證書ヲ受取ル手續ヲナサシメ或ハ其乘込ヲ止ム證書ヲ再用スル者ハ違用スル者ハ違式ニ照シテ處分スヘシ

第十條　警察官吏乘船證書ヲ臨檢シ着港上陸者ノ分ハ之ヲ領收シ一時途中上陸者ノ分ハ之ヲ本人ヘ還付スヘシ

明治十三年九月第三十九號

十四年第四十三號

○西洋形船水先免狀規則

明治十一年十二月九日第三十七號布告

第一條　明治十二年一月一日ヨリ以後下ニ記載スル海港即チ水先區ニ於テ西洋形船舶ノ水先人ト爲リ營業スル者及西洋形船舶ノ水先船トシテ使用スル諸船ヘハ此規則ニ從テ發行スル免狀ヲ交付スヘシ

第二條　水先ノ事業ニ關係シタル事務ハ農商務省ノ統轄ニ屬シ同省ニ於テハ充分其筋ニ明ナル者ヲ撰ミ此規則ニ準據シテ各試驗出願人ヲ試驗スヘシ

第三條　免狀ハ左ニ記載ノ海港即チ水先區ニ於ケル水先人ニ交付且現況ニ從テ其他ノ地方ニ於ケル水先人ニ交付スヘシ

第一　東京灣即チ伊豆國石廊岬ヨリ同國神子本島及大島波浮港ヲ通過シテ安房國野嶋崎ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス

第二　和泉灘即チ紀伊國宮岬ヨリ淡路國潮崎ノ仁頃ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ北淡路國極北ノ部ニ於ケル東經百三十五度ノ所ニ於テ畫シタル一線ヲ以テ疆界線トス

第三　和泉灘ヨリ瀬戸内ヲ通過シテ長崎迄

第四　長崎港即チ肥前國福田村ヨリ同國伊王島ノ極北ヲ通過シ同國沖島及香燒島ヲ經テ同國深堀ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス

第五　津輕海峽即チ陸奥國尻矢崎ヨリ渡嶋國惠山崎ニ至ル一線ヲ以テ其東界ヲ畫シ陸奥國大間村ヨリ同國龍飛崎ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ同國龍飛崎ヨリ渡嶋國白神崎ニ至ル一線ヲ以テ其西界トス

第四條　各海港即チ水先區内ニ供備スヘキ免許水先人ノ員數ハ其海港即チ水先區ノ現況ニ從フヘシ

第五條　水先人ノ免狀ヲ出願スル者ハ自己ノ技藝及性質殊ニ平素ノ狀行ニ係リ確實ナル履歷證書ヲ豫テ其本貫又ハ寄留地ノ地方廳官ヲ經テ農商務省ヘ差出シ置キ或ハ試驗開場ノ時ニ於テハ直チニ司驗官ヘ差出スヘシ

第六條　水先人タル者ハ年齡二十二歲ニ滿チ少クモ一ケ年間ハ一百噸以上ノ西洋形船ニ於テ船長若クハ一等運轉手ニ職ヲ執リシ者若クハ六ケ年間航海ニ從事シ其中一ケ年間ハ自今營業免許ヲ受ケントスル水先區内ニ於テ既ニ水先見習人ト爲リ航海ニ從事セルモノニ限ルヘシ但シ其水先區内ニ在ル諸港灣海峽及碇泊場ハ勿論危險ノ場所及之ヲ避ルタメノ重立タル記票或ハ方位又ハ潮ノ滿干潮流燈光浮標纜標ノ位置ニ悉皆通曉シ且大船ヲ指揮シテ之ヲ運轉スルニ充分適當セリト司驗官ヲ滿足セシムルヿヲ要スヘシ

第七條　受驗人試驗ヲ受ケ正シク須要ノ條件ニ叶ヒタルト司驗官之ヲ認ムルトキハ其旨ヲ農商務省ニ報告シテ直チニ免狀ヲ交付スヘシ

但シ此免狀ハ翌年一月一日以後ハ全ク其効力ヲ有セサルモノトス

第八條　免狀ノ書替ヲ請願セントスル者ハ毎年十一月一日以前其願書ヲ農商務省ニ差出スヘシ但シ之ヲ許可シ或ハ許可セサルトハ都テ農商務省ノ意見ニ因ルヘシ

第九條　免狀ヲ遺失スルモノ又ハ摩損スルモノハ其事由ヲ記シタル願書ヲ農商務省ヘ差出シ書替新免狀ヲ申請クヘシ

第十條　水先人ハ始メテ其免狀ヲ願受クルトキハ金拾圓又其書替毎ニ金一圓ノ手數料ヲ上納スヘシ

第十一條　水先人ノ試驗ヲ爲ストキハ定日ヨリ少クトモ十四日前其旨ヲ和洋兩種ノ新聞紙ヲ以テ公告スヘシ此公告ニハ其免狀ヲ與フヘキ人數ノ限リ及試驗ノ場所月日ヲモ記載スヘシ

第十二條　試驗出願人ノ履歷證書ヲ以テ充分滿足ノモノトスルトキハ其出願ノ順次ヲ以テ其姓名ヲ登錄シ登錄ノ順次ニ從テ之カ試驗ヲ爲スヘシ

第十三條　此規則ニ從テ水先免狀ヲ受ケタル外國人ハ其執業上ニ限リ日本帝國內何レノ海岸ト雖モ上陸シ且又其出發地ヘ陸路歸ルヲ得ルノ特許ヲ與フヘシ

第十四條　第三條ニ規定セル水先區內ニ於テ無免許ノ水先人船舶ヲ嚮導スルトキ免許水先人ヨリ其船舶ノ嚮導ヲ爲サント申入又ハ其爲メ信號ヲ爲ストキハ何時ニテモ免許水先人ヘ其職ヲ讓ルヘシ其職ヲ讓ルヲ拒ミ仍ホ其船舶ヲ嚮導シ或ハ免許水先人ト詐稱シ正當ナラサル免狀ヲ用ユル者ハ五十圓以內ノ罰金ヲ科スヘシ

第十五條　水先料ハ別表ニ記ス金高ニ超過スヘカラス但シ表中記載セサルモノハ其距離ノ遠近ニ隨テ船長ト水先人ノ間ニ相當ノ約束ヲ以テ定ムヘシ

第十六條　二人以上ノ免許水先人同時ニ於テ船舶ノ嚮導ヲ申入又ハ其信號ヲ爲ストキハ最初現ニ乘船シタル者其嚮導ヲ爲シ其水先料ヲ收領シ得ヘシ

第十七條　免許水先人水路嚮導專用ノ水先船ハ第十九條第一節第二節ニ示セル式ノ如ク之ヲ製シ其免狀ヲ農商務省ニ願出ツヘシ農商務省ハ檢査ノ上其免狀ヲ與フヘシ但シ此免狀ハ水先人免狀同樣其効一ケ年ニ限ル者トシ年々其書換ヲ願出ツヘシ

第十八條　各免許水先船ハ免許ヲ得タル區域內ニ於テ其水路嚮導用ノ爲メニハ港灣稅噸稅燈臺稅等ノ諸稅ヲ免スヘシ

第十九條　各水先船ハ左ノ徵候ヲ以テ區別スヘシ

第一　水先船ノ外部ハ總テ黑色タルヘシ

第二　船尾及大帆ノ上部ニ於テ國字及羅馬字ニテ免許水先船ノ文字並ニ其番號ヲ明瞭ニ書スヘシ

第三　免許水先船ニ免許水先人ノ乘込アルトキハ桅上或ハ船首或ハ旗竿若クハ他ノ認メ易キ場所ニ於テ日出ヨリ日沒マテ水先旗ヲ飜揚スヘシ但シ水先旗ハ明治十年一月甲第一號海軍省布達ニ照準スヘシ

第四　水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スルトキハ他船ニ用フル燈火ヲ揭ケス只檣頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一個ヲ揭ケ且十五分時ヲ超エサル間歇ヲ以テ閃光一

個又ハ數個ヲ發スヘシ」　水先船其營業場ニ於テ水路嚮導從事セサルトキハ他船ト同樣ノ燈火ヲ掲クヘシ

第二十條　日中ニ於テ左ニ記載スル信號ヲ表スルトキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

第一　前檣ニ於テ其船ノ船首英國「シヤツク」又ハ國旗ヲ掲揚スル事

第二　万國普通ノ水先信號ノ符PT字ヲ掲示スル事

夜間ニ於テ左ノ信號ヲ同時若クハ別時ニ表示スルトキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

第一　十五分時毎ニ青燈ヲ掲出スル事

第二　須臾ノ間欲ヲ以テ凡ソ一分時ノ間透明ナル白燈ヲ上甲板ノ舷部ニ於テ射發スル事

第二十一條　各免許水先人ヘハ其免許狀ハ勿論此規則ノ寫ヲ一通ツヽ交付スヘシ故ニ其筋ノ官吏又ハ雇主ヨリ其書類ノ閲覽ヲ要スルトキハ直ニ之ヲ示スヘシ若シ之ヲ拒ムトキハ農商務省ニ於テ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

第二十二條　此免狀ハ他人ニ貸與シ或ハ讓與スヘカラス若シ貸與シ或ハ讓與スルトキハ農商務省ニ於テ其免許ヲ取上クヘシ

第二十三條　農商務省ニ於テ免許水先人其本分ノ職務ニ堪ヘサルカ若クハ亂醉又ハ不行跡アルカ或ハ故ナクシテ其職務ヲ執ルヿヲ嫌ヒ若クハ之ヲ怠タリタルヿアリト思惟スルトキハ同省ヨリ官吏ニ命シテ之ヲ審問セシメ其情狀ニ隨ヒ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

○西洋形船々長運轉手機關手免狀規則

明治十四年十二月廿八日
第七十五號布告

此規則ハ海軍諸艦ニ關セサルモノトス

此規則中內國航船ト稱スルハ支那朝鮮ノ間ニ於ケル鴨綠江ヨリ露領黑龍江ニ至ルノ沿岸及ヒ薩哦嗹諸港ニ航セルモノモ亦包含ス

第一條　船長運轉手機關手ノ職ヲ執ル者ハ此規則ニ遵ヒ其職ニ應スル等級ノ免狀ヲ農商務卿ヨリ受ケ之ヲ所持スヘシ

第二條　免狀ハ甲乙及ヒ小形船機關手ノ三種トナシ又甲乙ノ兩種トモ船長一等運轉手二等運轉手一等機關手二等機關手ノ五ニ分チ各試驗規程ニ從ヒ及第セシ者ニ授與スヘシ

第三條　試驗ノ規程ハ第一號布達ニ據ルヘシ

第四條　高等ノ免狀ハ下等ノ免狀ニ代用スルヲ得下等ノ免狀ハ高等ノ免狀ニ代用スルヲ得ス　甲種船長ノ免狀ハ乙種船長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ運轉手機關手ノ免狀ニ於ケルモ亦同シ　乙種二等運轉手ノ免狀ハ從前ノ小形船々長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ乙種二等機關手免狀ノ小形船機關手免狀ニ於ケルモ亦同シ

第五條　從前授與シタル本免狀ハ甲種免狀ト同一ノ効力ヲ有シ又假免狀ハ當分ノ內乙種免狀ニ代用スルヲ得　從前授與シタル小形船々長ノ免狀ハ其効力ヲ存シ又從前ノ小形船機關手ノ免狀ハ當分ノ內本則ノ小形船機關手免狀ニ代用スルヲ得

第六條　免狀ノ書換又ハ再授ヲ請フトキハ手數料金一圓ヲ納ムヘシ但再授ヲ請フトキハ二名以上ノ證人ヲ要ス

第七條　免狀ハ其節吏員ノ指圖ニ應シ何時タリトモ其檢査ヲ受クヘシ

第八條　甲種免狀試驗課程ニ合格スト認メタル外國政府ノ本免狀ヲ所持セル船長運轉手機關手ハ更ニ試驗ヲ要セス原免狀同等ノ免狀ヲ授與スヘシ

第九條　左ノ三項ニ記載スル各船ハ其所用ノ區別及登簿噸數公稱馬力ノ限度ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有スル職員ヲ乘組マシムヘシ

第一項

三百噸未滿	外國航船	甲種免狀船長 同 一等運轉手 同 一名以上
三百噸未滿	同	甲種免狀船長 同 一等運轉手 同 二等運轉手 同 同
一百馬力	同	同 一等機關手 同

第二項

一百馬力	同	同 一等機關手 同 二等機關手 同
五百噸以上	同內國航船	乙種免狀船長 同 一等運轉手 同
一百噸以上 二百噸未滿	同	同 船長 同 一等運轉手 同 二等運轉手 同
三百噸以上 五百噸未滿	同	甲種免狀船長 同 一等運轉手 同 二等運轉手 同
二十馬力以上 五十馬力未滿	同	乙種免狀二等機關手 同
五十馬力以上 一百馬力未滿	同	乙種免狀 同 一等機關手 同 二等機關手 同
一百馬力以上	同	若クハ甲種免狀二等機關手 同 一等機關手 同 二等機關手 同

第三項

二十噸 瀛船ハ 拾噸 以上 一百噸未滿	同	乙種免狀二等運轉手 同 若クハ從前ノ小形船々長
二十馬力未滿	同	小形船機關手 同
三十馬力未滿	港內若クハ潮川用	小形船機關手 同

但二十馬力以上ノモノハ第二項ニ準ヒ機關手ヲ乘組マシムヘシ

前記各項ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有セス或ハ禁止停止ニ係リ受有シ能ハスシテ其職ヲ執リ出航スル者及之ヲシテ其職ヲ執ラシメ又ハ其職員ヲ減シテ出航セシムル者ハ各二圓以上二百五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第十條　農商務卿ハ船長運轉手機關手ノ技術劣等ニシテ其財ヲ執ルニ不適當ナリト考察スル件又ハ左ニ掲クル事項ニ於テハ其筋ノ吏員ヲシテ之ヲ審問セシメ其免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルヿアルヘシ

第一　亂醉粗暴其他ノ不品行若クハ指揮ニ悖戻シ又ハ職務ニ怠ル者

第二　失錯又ハ不當ノ所爲ニ由テ船ヲ失ヒ或ハ棄テ或ハ之ニ大損害ヲ生シ又ハ人命ヲ害ヒ或ハ大傷痍ヲ蒙ラシメシ者

第三　輕罪以上ノ刑ニ處セラレタル者

第十一條　前條審問中檢査官又ハ被害者ヨリ裁判所ニ出訴スルトキハ農商務卿其審問ヲ中止シ裁判確定ヲ俟テ之ヲ處分スヘシ

第十二條　免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルトキハ農商務卿其免狀ヲ取揚クヘシ若シ之ヲ拒ム者ハ二圓以上二百五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ但第九條末項ノ罪ト俱ニ發スルトキハ罰金ヲ並ヒ科スヘシ

第十三條　免狀使用ノ停止或ハ禁止ノ處分ニ服セサル者ハ其筋ヘ上訴スルヿヲ得ヘシ

第十四條　免狀ノ使用ヲ禁止シタル者ト雖モ一ケ年ノ後ニ至リ農商務卿ノ考察ヲ以テ相當ノ免狀ヲ授與スルヿアルヘシ

（農）第八號　明治十八年三月廿三日達

西洋形船々長運轉手機關手ハ第一號表式ニ準シ毎年六月三十日及ヒ十二月三十一日ニ於テ現ニ船舶ニ從事スル者ヲ調査シ六月分ハ八月十五日十二月分ハ翌年二月十五日限リ其他ノ海員ハ第二號表式ニ準シ毎年十二月三十一日ニ於テ現ニ船舶ニ在ル者ヲ調査シ翌年二月十五日限リ農商務省ヘ屆出ヘシ

但明治十六年農商務省第二十號及ヒ十七年第二十六號達幷十七年海軍省乙第十一號達ハ廢止ス

第壹號表式

明治何年何月何日船長運轉手機關手調

船名	船籍	主族氏名	登簿噸數 公稱馬力	內國人住所 外國人國名	氏名	所有免狀種類番號	職務	給料	雇入年月日

明治十四年五月第三十三號
明治十八年八月第廿七號布告

第二號表式

明治何年十二月三十一日海員調

船名	船主族籍氏名	職名	氏名	生年月	內國人住所 外國人國名	海軍兵役有無

（農）第二十號　明治十六年達

內國人民ノ雇ニ應シ其所有船舶ニ乘組居ル外國人有之向ハ國名氏名幷船名船主氏名共來十七年二月十五日限リ取調當省ヘ可差出尤自今雇入又ハ解雇候節ハ其都度可屆出

○海上衝突豫防規則

明治十三年七月十六日第三十五號布告

總則

第一條　此規則中蒸氣船ト雖帆モニテ走リ蒸氣ヲ用ヒサルトキハ帆前船ト看做シ蒸氣ヲ用ユルトキハ帆ヲ用ユルト用ヒサルトノ差別ナク總テ蒸氣船ト心得ヘシ

燈火

第二條　各船日沒ヨリ日出マテノ間ハ天氣ニ拘ハラス第三條第四條第五條第六條第七條第八條第九條第十條第十一條ニ記載スル燈火ヲ掲クヘシ決シテ他ノ燈火ヲ用フヘカラス

第三條　蒸氣船ハ航海中必ス左ノ燈火ヲ掲クヘシ

（甲）前檣又ハ其前面ニ於テ船體上二丈ヨリ低カラサル所ニ亮明ナル白燈一個ヲ掲クヘシ若シ船幅二丈ヲ超ルトキハ船體上其船幅ヨリ低カラサル所ニ之ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鍼盤ノ二十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ左右舷外ヘ十方位ツヽ即チ船ノ正首ヨリ各舷正横後ニ二方位マテ光線ノ及フヘキ樣ニ裝置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ五里（海里ニテ算ス以下之ニ倣ヘ）ノ距離ヨリ見ユベキモノヲ用フベシ

（乙）右舷ニ綠燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鍼盤ノ十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ右舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘキ樣ニ裝置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

（丙）左舷ニ紅燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鍼盤ノ十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ左舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘキ樣ニ裝置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用ユヘシ

(丁)右舷紅ノ舷舶ニハ燈火ヨリ前ニ少クモ三尺出テタル屏風樣ノ隔板ヲ其燈火ノ內側ニ當テヽ裝置シ右舷燈ハ左舷ニ在ル船ヨリ見ヘス左舷燈ハ右舷ニ在ル船ヨリ見ヘサル樣ニナスヘシ

第四條　蒸瀛船他船ヲ引テ航行スルトキハ兩舷燈ノ外ニ亮明ノ白燈二個ヲ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テヽ縱ニ連揭シ獨走ノ蒸氣船ト區別スヘシ此燈火ハ獨走ノ蒸氣船ニ揭クル白燈ト同製ナルヲ用ヒテ同所ニ揭クヘシ

第五條　帆前船ト蒸瀛船トノ差別ナク事變ノ爲ニ運用自由ヲ得サルトキハ夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球形ノ紅燈三個ヲ帆前船ナレハ蒸瀛船ニ揭クル白燈ノ位置ニ蒸瀛船ナレハ其白燈ノ代リニ三尺ヨリ少ナカラサル間ヲ隔テ連揭スヘシ但此紅燈ハ晴天ノ晴夜ニ少ナクモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用ユヘシ又晝間ハ直徑二尺ノ黑球若クハ黑色形象三個ヲ前檣ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭スヘシ

海底電信線ノ布置又ハ引揚ニ從事スル船ハ蒸瀛船ト帆前船トノ差別ナク夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球燈三個ヲ帆前船ナレハ蒸瀛船ノ白燈ノ位置ニ蒸瀛船ナレハ其白燈ノ代リニ六尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭シ其燈火ハ上下ノ二個ヲ紅色トナシ中央ヲ白色トナシ其紅燈ハ白燈ト同一ノ距離ヲ照スヘキモノヲ用フヘシ又晝間ハ前檣ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ直徑二尺ヨリ少カラサル形象三個ヲ六尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭シ其上下ノ二個ハ紅色球形ヲ用ヒ其中央ノ一個ハ白色縱菱形ヲ用フヘシ」

本條ノ船全ク運行セサルトキハ舷燈ヲ揭クヘカラスト雖モ運行スレハ必ス之ヲ揭クヘシ

本條ノ燈火及形象ヲ揭クル船ハ運用自由ヲ得スシテ他船ノ航路ヲ避クル能ハサルヲ標スルモノト他船ニ於テ心得ヘシ但危難羅リ救助ヲ要スル船ハ第二十七條ノ難船信號ヲ用フル者ト心得ヘシ

第六條　帆前船ハ自ラ走ルト他船ニ引カルヽトノ差別ナク白燈ヲ除クノ外第三條ニ記載スル蒸氣船ノ燈火ヲ揭クヘシ決シテ白燈ヲ揭クヘカラス

第七條　小形船ニ於テ天氣ノ模樣ニ依リ綠紅ノ二燈ヲ揭ケ置キ難キトキハ綠燈ハ右舷ニ紅燈ハ左舷ニ於テ何時ニテモ標スヘキ樣甲板上ニ用意シ置キ他船ノ我船ニ近寄リ來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄リ行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ各舷燈ヲ他船ヨリ最モ見ヘ易キ樣各舷ニ標スヘシ但此時綠燈ハ左舷ヨリ見ヘス紅燈ハ右船ヨリ見ヘサル樣注意スヘシ

此綠紅ノ燈ヲ置違ヒナク容易ニ取扱フ爲メ綠燈ノ燈籠ハ綠色紅燈ノ燈籠ハ紅色ニテ外面

ヲ塗リ且成規ノ隔板ヲ之ニ備ヘ置クヘシ

第八條　帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク碇泊中ハ最モ見ヘ易クシテ船体上ヨリ二丈ヲ超ヘサル所ニ白燈一個ヲ揭クヘシ○此燈火ハ直徑六寸六分ヨリ少カラサル球形ノ燈籠ニテ常ニ不同ナク最モ亮明ノ光ヲ發シ少クモ周回一里ノ距離ヨリ見ユル樣ニ爲スヘシ

第九條　水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スル時ハ他船ニ用ユル燈火ヲ揭ケス唯檣頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一個ヲ揭ケ且十五分時ヲ超ヘサル間歇ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ

水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサル時ハ他船ト同樣ノ燈火ヲ揭クヘシ

第十條　甲板ナキ漁船及ヒ甲板ナキ小船航行中ハ必ズシモ他舷ニ用ユル舷燈ヲ揭クルニ及ハス然レトモ舷燈ノ代ニ一面ハ綠色ノ硝子板一面ハ紅色ノ硝子板ヲ備ヘタル燈籠一個ヲ手近ニ備置キ他船ノ我船ニ近寄リ來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄リ行クトキハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ其燈籠ヲ標スヘシ但シ此時ニ綠光ハ左舷ヨリ見ヘス紅光ハ右舷ヨリ見ヘサル樣注意スベシ

右漁船及ヒ小船碇泊シタルカ或ハ綱ヲ卸シタルトキハ亮明ナル白燈一個ヲ標スヘシ且ツ便宜ニ從ヒ度々閃光ヲ發シ又晝夜ニ拘ハラス霧中號角ヲ用ルモ苦シカラス

第十一條　他船ニ追越サレントスル船ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ標シ又ハ閃光ヲ發スヘシ

第十二條　蒸滊船ハ滊笛ヲ音響ノ妨碍物ナキ所ニ裝置シ且ツ鞴其他ノ機械ヲ以テ發聲スヘキ霧中號角或ハ尋常ノ霧中號角及ヒ號鐘ヲ備フヘク帆前船ハ同樣ノ號角及ヒ號鐘ヲ備フヘシ但此滊笛號角及ヒ號鐘ハ善ク其用ニ適セサルヘカラス

霧中又ハ降雪中ハ晝夜ノ差別ナク本條ニ記載セル信號ヲ左ノ如ク用フヘシ

(甲)蒸滊船航行中ハ滊笛ヲ以テ二分時ヨリ多カラサルモ間歇ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ

(乙)蒸滊船航行中ハ號角ヲ以テ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ二聲ヲ連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受タルトキハ三聲ヲ連發スヘシ

(丙)帆前船ト蒸滊船トノ差別ナク航行中ニ非レハ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ號鐘ヲ鳴スヘシ

霧中速力

第十三條　帆前船ト蒸滊船トノ差別ナク霧中及ヒ降雪中ハ程好キ速力ヲ以テ走ルヘシ

航法

第十四條　二艘ノ帆前船互ニ近寄リテ衝突ノ懼アルトキハ一方ノ船ヨリ左ノ如ク航路ヲ避ク

ヘシ

(甲)一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路避クヘシ

(乙)左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

(丙)一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同シカラサルトキハ左舷ニ風ヲ受タル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

(丁)一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同シキトキハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路ヲ避クヘシ

(戊)船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十五條　二艘ノ蒸氣船正シク眞向又ハ殆ント眞向ニ行逢フテ衝突ノ懼アルトキハ兩船共鍼路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過スヘシ

本條ハ兩船正ク眞向又ハ殆ト眞向ニ行逢フテ衝突ノ懼アルトキニ限リ應用スヘク各其鍼路ヲ保チテ必ス替リ行クトキニ應用ス可ラス

本條ヲ應用スヘク至當ノ場合ハ兩船共ニ正シク眞向又ハ殆ト眞向ニ行逢ヒタルトキ即チ晝間ハ我船ノ檣ト他船ノ檣ト一直線又ハ殆ト一直線ニ見ユルトキ夜間ハ互ニ他船ノ兩舷燈ヲ一時ニ見ルトキニ限ルヘシ

本條ハ晝間他船ノ我鍼路ヲ横切リテ我船ノ前面ニ見ユル時又ハ夜間我船ノ紅燈他船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スル時又ハ我船前面ニ綠燈ナクシテ紅燈ヲ見或ハ紅燈ナクシテ綠燈ヲ見ル時又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他ノ位置ニ見ル時ハ應用スヘカラス

第十六條　二艘ノ蒸氣船互ニ航路ヲ横切リ衝突ノ懼アルトキハ我右舷ニ他船ヲ見ル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十七條　帆前船ト蒸氣船ト互ニ近寄リ衝突ノ懼アルトキハ蒸氣船ヨリ帆前船ノ航路ヲ避クヘシ

第十八條　總テ蒸氣船他船ニ近寄リ衝突ノ懼アルトキハ速力ヲ緩ニシ又ハ時宜ニ依リ停止シ且後退スヘシ

第十九條　蒸氣船此規則ニ遵テ鍼路ヲ取ルトキハ左ノ氣笛信號ヲ以テ他船ニ其鍼路ヲ通知スルヲ得ヘシ

短聲一發　我船ノ鍼路ヲ右舷ニ取ル

短聲二發　我船ノ鍼路ヲ左舷ニ取ル

短聲三發　我船一杯ノ速力ニテ退却ス

此信號ヲ用フルト否ヲサルトハ隨意タルヘシ但此信號ヲ用ヒタルトキ之ヲ用ヒタル船ハ

必ス其信號通リニ其鍼路ヲ取ラサルヘカラス

第二十條　帆前船ト蒸瀣船トノ差別ナク他船ヲ追越サントスル𪜈ハ以上ノ規則ニ拘ハラス總テ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十一條　總テ蒸瀣船狹隘ノ水路ヲ通航スルニ當リ無難ニ通行シ得ル𪜈ハ其航路ノ中流ヨリ其船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十二條　以上ノ規則ニ依リテ兩船ノ內一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クル𪜈ハ他船ニ於テ其鍼ヲ保守スヘシ

第二十三條　此規則ヲ遵守スルニ就テハ航海上百般ノ危嶮ニ心ヲ配リ且危險切迫シテ此規則ヲ遵守スル暇ナキ特別ノ場合ニ於テハ臨機ノ所置ヲ以テ之ヲ避クルニ注意スヘシ

懈怠ノ責

第二十四條　此規則ニ於テ點燈又ハ信號又ハ見張ヲ怠リ又ハ海員ノ常務又ハ臨機處置ニ於テ必要ナル用心ノ怠リヨリ生シタル事件ニ於テハ船主船長乘組人員各其責ヲ免ル可カラサルモノトス

別則

第二十五條　此規則ハ各地方官ニ於テ特ニ制定シタル港川其他內海ノ航行規則ノ施行ニ干涉セサルモノトス

第二十六條　此規則ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラルヽ船ニ增揭スル列位燈火及ヒ信號燈火ニ付各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ニ干涉セサルモノトス

難船信號

第二十七條　危難ニ罹リ他船又ハ陸地ヨリ救助ヲ要スル船ハ左ノ信號ヲ用ヒ同時又ハ別々ニ施行スヘシ

晝間信號

(一)凡一分時每ニ一砲發ヲナスヿ

(二)万國船舶信號書ニ揭載スルNCノ難船信號ヲ標スルヿ

(三)方形旗ノ上又ハ下ニ球若クハ之ニ類似スル物ヲ揭クル遠隔信號ヲ標スルヿ

夜間信號

(一)凡一分時每ニ一砲發ヲナスヿ

(二)船上ノ發焰(タール桶油樽等ヲ燃燒スルノ類)

(三)各色各種ノ星火ヲ發射スル榴彈或ハ火箭ヲ一次一發ツヽ數分時每ニ打揚ルヿ

罰則

第二十八條　凡船舶合格ノ燈籠及ヒ信號器ヲ所持セス若クハ點燈及ヒ信號ヲ怠リ又ハ燈籠ノ裝置ヲ過リタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

但シ甲板ナキ漁船及ヒ甲板ナキ小船ハ此限ニ在ラス

附則

西班牙國フイニステル岬以北ノ歐洲沿海ノ漁船及小船ニノミ左ノ規則適用ニ付該地方航行ノ諸船ニ於テ之ヲ心得ヘシ

(甲)登簿噸數二十噸以上ノ漁船航行シ及次ノ各項ニ記載シタル燈火ヲ掲クルヲ要セサル者ハ他ノ航行船ト同樣ノ燈火ヲ掲クヘシ

(乙)流網ヲ用ヒ漁獵ニ從事スル船ハ其船ノ最モ見エ易キ場所ニ於テ二個ノ白燈ヲ掲ケ其燈火ノ縱距離ハ六尺以上十尺以下ヲ隔テ又横距離ハ其船ノ龍骨ト平行線ニ量リ五尺以上十尺以下ヲ隔ツヘシ但此二個ノ白燈ハ下ニ掲クルモノヲ上ニ掲クルモノヨリ前方ニ置キ且晴天ノ暗夜二周回諸方三里以上ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用ユヘシ

(丙)釣絲ヲ垂レ釣魚ニ從事スル船ハ流網ヲ以テ漁獵ヲ以テ從事スル船ト同一ノ燈火ヲ掲クヘシ

(丁)漁獵ニ從事スル船其屬具ノ岩礁其他障碍物ニ固着セル爲メ其所ニ駐留スルトキハ碇泊船ト同樣ノ燈火及霧中信號ヲ用ユヘシ

(戊)漁船及甲板ナキ小船ハ何時ニテモ本條ニ依リテ掲クヘキ燈火ノ外ニ閃光ヲ發スルハ苦シカラス曳網ノ類ヲ用ヒ漁獵ニ從事スル船ニ於テ閃光ヲ發スルトキハ總テ其船ノ後部ニ於テスヘシ但曳網爬網其他曳網類ヲ船尾ニ繫キタル時之ヲ船首ニ於テ發スルハ此限ニ在ラス

(己)漁船及甲板ナキ小船碇泊中ハ日沒ヨリ日出マテノ間少クモ周回諸方一里ノ距離ヨリ見ユヘキ白燈ヲ掲クヘシ

(庚)霧中又ハ降雪中ニハ網ニ繫キタル流網船及ヒ曳網爬網其他曳網ノ類ヲ用ヒ漁獵ニ從事スル船及ヒ釣絲ヲ垂レ釣魚ニ從事スル船ハ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ霧中號角ト號鐘トヲ迭ヒニ鳴ラスヘシ

○第三十一號　明治十四年五月廿八日布告

明治十三年七月第三十五號布告海上衝突豫防規則ニ記載シタル檣燈及ヒ舷燈ハ農商務省ノ許可ヲ受ケタル者ニアラサレハ之ヲ製造スルヿヲ得ス犯ス者ハ貳圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

○船燈監査手續概目

明治十八年四月七日農第十一號達

第一　船燈ヲ監査スルハ其所轄ノ府縣廳ニ於テ監査員ヲ派出シ製造所販賣所及ヒ碇泊ノ船舶ニ就キ施行スルモノトス

但西洋形船舶檢査規則ニ據リ檢査スヘキ船舶及ヒ隔板ナキ漁舟小船等ハ此限ニアラス

第二　製造所、販賣所ハ舷燈製造及ヒ販賣規則第十條ニ遵ヒ精細ニ監査シタル上合格ノ燈器ニハ其廳名アル檢印（檣燈ハ側面舷燈ハ前面）ヲ刻シ不合格ノモノハ製造方法ニ順シテ改造セシムヘシ

第三　船燈ハ府縣廳ノ檢印ナキモノ及ヒ免許販賣所外ニ於テ販賣スルヲ許サス

第四　繫泊ノ船舶ハ船籍ノ自他ニ係ラス定時（毎年二回四月十月）又ハ臨時監査ヲナシ別紙甲號書式ニ據リ監査請書ヲ附與スヘシ但不合格ノ舷燈、隔板及ヒ碇泊燈ヲ所持シ若クハ之カ裝置ヲ誤ルモノアレハ懇篤ニ危害ノ在ル所ヲ指示シ速カニ改良セシムヘシ

第五　無檢印ノ舷燈（舶來品ヲ除キ）ヲ所持スル者其購入ノ年月此監査手續施行以後ニ係ルトキハ之ヲ販賣セシ者ノ住所氏名ヲ取糺シ其地方廳ニ通報スヘシ

第六　監査ノ際船長又ハ海員中重立タル者ニ就テ海上衝突豫防規則中必要ト認ムル條件ヲ尋問シ若シ之ニ通曉セサル者アルトキハ懇ロニ説明スヘキモノトス

第七　監査證書ハ第一回ヨリ第五回目ノ監査ヲ了アル迄ハ各地方ヲ通シ該證書欄内ニ其都度加書押印シ參照ノ便ニ供スヘシ

第八　毎回監査ヲ了リタル上ハ別紙乙丙號書式ノ監査表ヲ製シ一ヶ年兩度（六月十二月）ニ取纏メ農商務省ヘ報告スルモノトス

第九　製造人、販賣人ノ住所氏名ハ各府縣相互ニ通報スルモノトス

但人員增減、改名、轉籍等其都度本項ニ據ルヘシ

第十　船燈ニ關シ犯則ノ所分ニ係ルモノアルトキハ其事項ヲ詳細農商務省ヘ屆出ツヘシ

第十一　右各項ニ基キ尚ホ地方ノ便宜ニ依リ細目ヲ設クルハ妨ケナシト雖モ此場合ニ於テハ更ニ農商務省ヘ屆出ルモノトス

甲號

船燈監査之證						
監査回數	一回	二回	三回	四回	五回	
監査年月日						
廳府縣監査員氏名印						
船名						

乙號

明治　年　月中

船燈製造所及販賣所監査報告書

府縣名 印

積石（噸）	本船定繫場名	船主本籍氏名	船頭本籍氏名	舷燈種類及番號	船燈製造人氏名	舷燈、白燈及隔板適否	啟戾之部分	記事

丙號

明治　年自　月至　月

船燈監査報告書

應府名 印

監査月日	監査地名	銅製大小船燈員數及適否	眞鍮製大小船燈員數及適否	鐵製大小船燈員數及適否	製造人氏名	販賣人住所姓名	記事

監査月日	監査地名	船名	積高	本船定繫場名	船主氏名	船頭氏名	船燈製造人氏名	舷燈種類及番號	舷燈、白燈及隔板適否	摘要

○商船內犯罪取扱規則

明治十四年十二月十五日
第六十五號布告

第一條　何人タリトモ商船內ニ於テ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受タル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スヿヲ得

第二條　船長告訴告發ヲ受タルトキ又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタルトキハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ

但調書ヲ作ルヿ能ハサルトキハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條　船長ハ證憑及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船舶碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタルトキハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○船稅規則

明治十六年四月十七日
第十三號布告

船稅規則別冊ノ通制定シ明治十六年七月一日ヨリ施行ス

但船稅ニ關スル從前ノ布告布達ハ廢止ス

第一章　鑑札　稅率　免稅

第一條　凡ソ船舶ハ此規則ニ依リ課稅スルモノトス

第二條　船舶所有主ハ其船舶定繫場ヲ定メ定場所所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ヲ乞フヘシ

第三條　新規造船シタル者其造船場所在ノ府縣管內ニ定繫場ヲ定メサルトキハ該廳ニ願出檢査ヲ受ケ假鑑札ヲ乞ヒ定繫場ニ回遵ノ上其地方廳ニ願出本鑑札ト引換ヲ乞フヘシ

第四條　船體ヲ變更シ積量若クハ間數ニ增減ヲ生スルトキハ其定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第五條　船舶ヲ賣買讓與シタル者ハ双方連署ノ上買受讓受主ノ定ムル定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第六條　船舶ノ率稅ハ左ノ如シ

西洋形蒸氣船　百噸ニ付一年金十五圓

同

日本形船積百五十石以上

同積石五十石未満

艀漁船小廻船（積石ニ拘ラス）長（自舳梁至艫梁）三間迄ハ一年金三十錢

但三間以上壹間ヲ加フル毎ニ金十五錢ヲ増加ス

遊船　長（自舳梁至艫梁）三間迄ハ一年金五十錢

但三間以上一間ヲ加フル毎ニ金二十五錢ヲ増加ス

第七條　本鑑札又ハ假鑑札ハ航行若クハ回漕ノ𪜈之ヲ本船ニ所持スヘシ

但日本形積石五十石未満ノ船並艀漁船小廻船ノ本鑑札ハ其船ニ釘付スヘシ

第八條　解船破船又ハ水火盜難等ニ因リ船舶ヲ失ヒタル者ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘシ

第九條　鑑札ヲ亡失毀損シタル𪜈或ハ改名代替ノ時或ハ船號ヲ改メ若クハ定繫場ヲ變換シタル𪜈ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ再渡若クハ引換ヲ乞フヘシ

第十條　左ニ掲クル船舶ハ其税ヲ免除ス其所有主ハ地方廳ニ届出免税ノ烙印ヲ乞フヘシ

倉庫船

水田ノ耕作ニ用ユル船

水災ノ爲メ陸地ニ備ヘ置船

橋梁ニ換ヘ渡場ノミニ用フル船

船橋ノ組成ニ用フル船

航海中本船ニ揚ケ置ク傳馬船「バッテーラ」船ノ類

第二章　納税

第十一條　税金ハ一年ヲ二期ニ分チ一月一日七月一日現在ノ船舶ヨリ徵収スル者トス其前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限リ定繫場所在ノ地方廳ニ上納スヘシ

第十二條　新規造船シタル者ハ鑑札ヲ受クル𪜈該期ニ係ル税金ヲ上納スヘシ

第十三條　船體ヲ變更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生シタル𪜈ハ次期ヨリ其積量又ハ間數ニ隨ヒ税金ヲ納ムヘシ

第十四條　他管下ニ定繫場ヲ定ムル者ハ該地ニ代人ヲ定メ連署ノ上其定繫場所在ノ地方廳ニ届出納税ヲ辨セシムヘシ

第十五條　本船管内ニ定繫場ヲ定メタル者不在ノ𪜈ハ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納税ヲ辨セシムヘシ

第十六條　假鑑札ヲ受タル船舶定繫場ニ回漕中納稅期限ニ係ル件ハ豫メ定繫場所在ノ地ニ代人ヲ定メ其地方廳ニ屆出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十七條　此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ處罰ノ後其稅金ヲ追徵ス

第三章　罰則

第十八條　此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ其脫稅高五倍ノ科料若クハ罰金ニ處ス

第十九條　免稅船ヲ有稅船ノ用ニ充タル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條　第三條第五條第七條第九條第十四條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及ヒ第十條ノ免稅船ニ烙印ヲ受サル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條　此規則ニ依リ罰金若クハ科料ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

但刑法第七十五條第七十六條ノ場合ハ此限ニアラス

（農）第十三號　明治十六年十月廿五日達

明治十四年第十二號公布ニ依リ自今蒸滊十噸風帆ハ二十噸以下及湖川港灣ヲ限リ運航スル船舶ハ左ノ雛形ニ準シ取調每年六月三十日ノ現在數ハ其年八月十五日限十二月三十一日ノ現在數ハ翌年二月十五日限當省ヘ可屆出

○第十六號　明治十八年七月八日布告

日本形五百石以上ノ船舶ハ明治二十年一月ヨリ其製造ヲ禁止ス

○船稅事務取扱心得

明治十六年六月（大）第三十六號達

第一條　西洋形蒸滊風帆船幷ニ日本形積石五十石以上船新造又ハ變造シ檢査願出ルトキハ明治四年十二月廿六日大藏省達噸石數改方法則ニ據リ査定シ第一號雛形ノ通日本形積石五十石未滿ノ船幷ニ解漁船小廻船遊船ハ規則第六條ニ據リ長ノ間數ヲ定メ第二號雛形ノ鑑札ヲ調製下付スヘシ

但假鑑札ハ雛形鑑札ノ上ヘ假ノ字ヲ記入スヘシ

第二條　噸數ハ一噸石數ハ一石間數ハ一間ニ止メ其以下端數ハ切捨ツヘシ

第三條　規則第七條但書鑑札釘付ノ箇所及ヒ仝第十條免稅印烙記ノ箇所ハ該船舶ノ艫外部後面ニ之ヲ爲スヘシ

但烙印ハ從前ノ通リタルヘシ

第四條　規則第三條ニ據リ檢査ヲ爲シ假鑑札ヲ付與シタルトキハ其旨定繫場所在ノ郡區役所ニ通知スヘシ其通知ヲ受タル郡區役所ハ直ニ其地ノ船籍ニ編入シテ該期ノ稅金ヲ收入シ追テ本鑑札引換相渡シタル上最前通知ノ郡區役所ニ報道スヘシ

但他府縣ノ直轄ニ係ルモノハ本廳ヘ屆出其郡區役所ヘ分任相成居分ハ本文ニ準シ直チニ該郡區役所ヘ通知スヘシ

第五條　船舶賣買讓與其他ニテ定繫場ヲ變換シ其新舊定繫場甲乙郡役所ニ互渉スル件ハ乙役所ニ於テ其地ノ船籍ニ編入鑑札引換相渡シ直チニ甲郡役所ニ報道シ其他府縣管轄ニ係ルモノハ前條ノ但書ニ準シ取扱フヘシ

第六條　前二條ノ手續ニ依リ鑑札引換ノ節ハ更ニ檢査ヲ要セス舊鑑札若クハ假鑑札ニ記載ノ噸石數又ハ間數等ニ據ルヘシ

但其返納セシ舊鑑札假鑑札ハ不取締無之樣消却致スヘシ

第七條　船舶ノ内其船体ノ構造若クハ綱具ノ裝置等西洋形ニ擬擬セシモノハ總テ西洋形船ニ準シテ課稅スヘシ

第八條　西洋形蒸滊風帆船ハ港灣湖川等ヲ運用スル小船ト雖モ都テ其噸數ニ依リ鮮漁船小廻船ハ積石數五十石以上ト雖モ都テ其間數ニ依リ課稅スルモノトス

第九條　船稅表及免稅船員數仕譯書ハ第三號第四號雛形ニ倣ヒ毎半期分調製各翌月八日限リ差出スヘシ

但船數增減仕譯書ハ從前ノ雛形ニ倣ヒ稅表ニ添エ差出スヘシ

第一號雛形　木札寸法曲尺竪五寸幅三寸厚

（朱）海岸又ハ何河（湖）岸ト書スルモノハ郡區ノ下其町村ヲ記スヘシ第二號雛形亦仝シ

（朱）日本形船ハ何石積日本形船ト記スヘシ及ヒ木品適宜

表

何國何郡區

定繫場何港海岸何河（湖）岸

何噸積西洋形蒸滊風帆船

何丸

面

押切判

船鑑札

第何號

何國何郡區何町村番地

何ノ誰

第二號雛形　木札寸法其他前ニ同シ

（朱）漁船又船ハ小廻船遊船ト記ス但日本形積石五十石未滿ノ船ハ小廻船ト記スヘシ

（朱）一間未滿ノ船ハ一間未滿ト記スヘシ

表

第何號

何國何郡區

定繫場海港岸何河（港）岸

舳梁ヨリ艫梁マテ何間

何船

押切判

船鑑札

郡區役所名烙印

裏面

明治何年何月何日

何國何郡區何町村番地

何ノ誰

裏面白木

（朱）鑑札下付ノ年月日第二號雛形亦仝シ

裏面

明治何年何月何日

何府縣

郡區役所名烙印

第三號雛形

用紙美濃紙

明治何年自何月至何月船税表

何郡區

凡例

一西洋形蒸氣船風帆船ハ五十噸未滿及ヒ五十噸以上百噸未滿ヲ區別シテ雛形ノ如ク小計ヲ朱書スヘシ、其餘ハ百噸ヲ加フル毎ニ右ニ倣フヘシ

一日本形船ハ五十石以上百石未滿其餘ハ百石ヲ加フル毎ニ右ニ倣フ

一解漁船及ヒ遊船ノ部ニアル長三間ノ區ニ記スルモノハ實際三間未滿ノモノアルモ總テ三間ト見做シ其艘數ニ乘算シタル間數ヲ記入スヘシ

▲ハ朱

何（區部）

西洋形蒸氣船ノ部

噸數區別	艘數	積噸數	税金
四十噸			
四十九噸			
▲小計			
五十噸			
九十九噸			
▲小計			
計			

西洋形風帆船ノ部

噸數區別	艘數	積噸數	税金
十噸			
四十九噸			
▲小計			
五十噸			
九十九噸			
▲小計			
計			

日本形船五拾石以上ノ部

石數區別	艘數	積石數	税金
五十石			
九十九石			

▲小計
百石
百九十九石
▲小計
計

五十石未滿浮漁并小廻船ノ部

間數區別	船數	間數	稅金
長三間			
長四間			
計			

遊船ノ部

間數區別	船數	間數	稅金
長三間			
長四間			
計			
稅金計			

右ハ明治何年自何月至何月船稅表書面ノ通相違無之候也

年月日

郡區長何之誰印

第四號雛形

何府知事縣令某殿

一発稅船何艘　　発稅船員數仕譯書

内

倉庫船　何艘
水害豫備船　何艘
水圓耕作用船　何艘
渡船　何艘
船橋用船　何艘
傳馬「バッテーラ」　何艘

右ハ明治何年自何月至何月発稅船書面ノ通候也

年月日

郡區長何之誰印

何府知事縣令某殿

(大)第七十八號　明治十八年二月七日達

【船稅事務取扱心得書】

明治十六年當省第三十六號達船稅規則取扱心得書第一號第二號雛形船鑑札ノ押切判ハ自今廢止ス

◉山口縣ヨリ新造ノ免稅船證票ノ義ニ付大藏省ヘ伺　四月廿一日

他管下ノ者本縣下ニ於テ免稅船ヲ新造シ其定繫場迄帰港ノ節ハ假鑑札下付スヘキ限ニ非ス ヤ然ルトキハ證票ナク管理上不都合ニ付假鑑札付與セサル旨ノ證書ヲ下渡シ可然哉

指令　五月六日　（伺ノ通）

◉愛媛縣ヨリ船稅免否ノ儀ニ付大藏省ヘ伺　明治十六年九月十日

第一條　官報第五十六號伺指令欄內大坂府伺第二條ニ對シ御指令（川中附洲海面埋立等ノ耕地ニシテ船ニ非サレハ往來シ能ハサル場所ヘ農具作物肥料等ヲ運搬スルノ外他ノ用ニ供セサル船ハ橋梁ニ換ヘ渡船ノミニ用フル船ニ準シ免稅スヘシ）ノアリシニ因レハ甲ノ島民ニシテ乙島ノ耕地ニ肥料作物農具等ヲ運搬スルニ止リ一切他ノ用ニ供セサル船モ同樣免稅ト心得可然哉

第二條　甲乙兩島間若クハ甲ノ陸地ト乙ノ島嶼トノ間ニ一日數回往復スル渡船ハ橋梁ニ換フルモノトシ免稅ト心得然ヘキ哉

指令　明治十六年十月十六日

第一條　申出ノ通

第二條　渡船ヲ定メ彼我ノ往復ノミニ用フル渡船ハ申出ノ通

◉秋田縣ヨリ官用船處分方ノ義ニ付大藏省ヘ伺　明治十六年九月廿六日

本年四月第十三號ヲ以テ船稅規則公布アリ船稅ニ關スル從前ノ布告布達ハ廢止セラレシニ該稅則中官用船處分方明文ナシト雖モ六年第九十三號布達ニ基キ管廳使用船ハ總テ無稅ニテ廳名號ノ燒印ヲ適宜ノ個所ニ押シ使用シ然ルヘキ哉

指令　明治十六年十月十六日

◉福井縣ヨリ渡船免稅ノ義ニ付大藏省ヘ伺　明治十六年七月廿一日

通路ナキ灣嶋ニシテ人ヲ乘スルノミニ用フル一村持ノ渡船アリ甲乙丙ノ各地ヘ渡航スルノ如キモ免稅ノ部ナルヤ

指令　明治十六年八月六日

橋梁ニ換ル者ノ外ハ免稅ノ限ニアラス

◉滋賀縣ヨリ湖川日本形船ノ義ニ付大藏省ヘ伺　明治十六年七月三日

湖川ノ日本形船ハ積石五十石以上ト雖モ小廻船ト見做シ可然哉

指令　明治十六年七月十七日

小廻一途ニ用フルモノニ限リ積石ニ拘ハラス小廻船トス

○船舶積量測度規則

明治十七年四月廿四日第十號布告

第一條　凡ソ船舶（海軍艦船ヲ除ク）ノ積量ハ此規則ニ依リ測度スルモノトス

第二條　船舶ノ積量ヲ測度スルハ總テ曲尺ヲ用ヒ尺位ヲ以テ單位トシ其尺度ハ分位ニ止ムヘシ

第三條　西洋船ノ積量ハ百立方尺位ヲ以テ一噸トシ日本形船ノ積量ハ十立方尺位ヲ以テ一石トス

第四條　西洋形船ニシテ甲板一層ノ者ハ其甲板ヲ以テ量噸甲板トシ二層ノ者ハ其上層ヲ以テ量噸甲板トシ三層以上ノ者ハ其最下ヨリ第二層ニアル者ヲ以テ量噸甲板トス

第五條　西洋形船ニシテ甲板一層若クハ二層ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トシ又甲板三層以上ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上各甲板間ノ噸數及ヒ最上甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

甲板ナキ者ハ舷端以下ノ噸數ヲ以テ該船ノ總噸數トシ又舷端以上ニ船室アレハ其噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

第六條　漁船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乘組人常用室及ヒ機關室ノ噸數ヲ除キタルモノトス

帆船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乘組人常用室ノ噸數ヲ除キタルモノトス

第七條　乘組人常用室トシテ除クヘキ噸數ハ總噸數ノ百分ノ六トス

第八條　機關室トシテ除クヘキ噸數ノ割合ハ左ノ如シ

外車漁船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ二十ヨリ三十マテハ總噸數ノ百分ノ三十七

暗車漁船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ十三ヨリ二十マテハ總噸數ノ百分ノ三十二

機關室ノ廣狹ニ依リ前項ノ割合ニ適セサルモノハ該室ノ噸數ニ外車機關ナレハ其二分ノ一ヲ加ヘ暗車漁船ナレハ其四分ノ三ヲ加ヘタルモノトス

第九條　日本形回漕船ハ船梁上下船艙ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トシ又其構造回漕船ニ異ナル者ハ該端以下ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トス

第十條　船舶ノ噸數及ヒ積石測度ノ方法ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

○公稱馬力算定方法

明治十七年五月廿二日（農）第十三號達

第一　冷器ヲ備ヘサル機關ノ公稱馬力ハ氣筩吸鍔ヲ英寸ニテ測リ之ヲ自乘シ得數ヲ拾個ニテ除シタルモノ

但漏筩第二個以上ヲ備ルモノハ本法ニ從テ一個毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ

第二　漏器ヲ備フル機關ノ公稱馬力ハ漏筩吸鍔ノ經ヲ英寸ニテ測リ之ヲ自乘シ得數ヲ三拾個ニテ除シタルモノ

但シ瀛筩二個以上ヲ備ルモノハ本法ニ從テ一個毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ

第三　冷瀛器ヲ備ヘサル聯成機關ノ公稱馬力ハ其各瀛筩吸鍔ノ經ヲ英寸ニテ測リ各之ヲ自乘シテ相加ヘ其得數ヲ十個ニテ除シタルモノ

但瀛筩二具以上ヲ備ルモノハ本法ニ從テ一具毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ

第四　冷器ヲ備フル聯成機關ノ公稱馬力ハ其各器筩吸鍔ノ經ヲ英寸ニテ測リ各之ヲ自乘シテ相加ヘ其法數ヲ三十個ニテ除シタルモノ

但書同斷

○西洋形船舶檢査規則

明治十七年十二月廿二日第三十號布告

第一條　西洋形船舶（海軍艦船ヲ除ク）ハ規則ニ遵ヒ檢査ヲ受クヘシ

但登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル風帆船ハ此限ニアラス

第二條　船舶檢査所設置ノ場所ハ農商務卿之ヲ定ム

第三條　檢査所々在ノ地方ヲ航行スル船舶ノ檢査ハ其最寄檢査所ニ願出ヘシ

第四條　檢査所未設ノ地方ヲ航行スル船舶ノ檢査ハ其船籍アル地方廳ヲ經テ農商務省ニ出願スヘシ

第五條　登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル瀛船ノ檢査ハ其船籍アル地方廳ニ願出ヘシ

（農）第十四號　明治十八年七月四日達

明治十七年十二月第三十號布告西洋形船舶檢査規則第五條ニ揭クル瀛船（登簿免狀ヲ受有セサル）檢査ノ義ハ東京府下ニ限リ當省ニ於テ直轄候條右檢査ハ東京船舶檢査所ヘ願出ヘシ

第六條　檢査官吏ハ農商務卿之ヲ命ス但第五條ノ瀛船ニ係ル檢査官吏ハ府知事縣令之ヲ命ス

第七條　檢査官吏ニ於テ船舶ヲ檢査シ航行ニ適當ト認ムル片ハ農商務省ヨリ左ノ事項ヲ記載シタル檢査証書ヲ交付ス

但地方廳ノ檢査ニ係ルモノハ其廳ヨリ之ヲ交付ス

番號。船名。船主氏名。定繫場名。登簿噸數。端船其他必要ノ所屬品。航行シ得ヘキ場所ノ定限。證書有效期限。瀛船ニハ左ノ事項ヲ加フ

公稱馬力。瀛機ノ種類。瀛罐ノ種類。最大瀛壓。旅客定員

第八條　檢査官吏ニ於テ船舶ヲ檢査シ航行不適當ト認ムルトキハ其修理ヲ命シ或ハ出航ヲ差止ムヘシ

第九條　檢査證書ノ效力ハ其船ノ現狀ニ依リ六ケ月十二ケ月ニ區別ス

第十條　檢査證書ハ船内最モ見易キ場所ヘ揭ケ置クヘシ

第十一條　檢査證書ヲ亡失若クハ毀損シタルトキハ其理由ヲ詳記シ再渡ヲ願出ヘシ

第十二條　船名船主及ヒ定繫場ヲ變更シタルトキハ農商務省又ハ地方廳ニ屆出ヘシ

第十三條　船体若クハ瀕機瀕罐其他要部ノ修理若クハ變更ヲナシタルトキハ更ニ檢査ヲ受クヘシ

第十四條　船舶航行ノ用ヲ爲サヽルニ至リタルトキ又ハ除籍トナリタルトキハ直ニ檢査證書ヲ農商務省又ハ地方廳ニ返納スヘシ

第十五條　檢査證書ノ有效期限内ト雖モ檢査官吏ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テハ臨檢スルコアルヘシ

第十六條　船舶ノ檢査ヲ受ケスシテ航行シ又ハ無效ノ檢査證書ヲ使用シ又ハ檢査證書ニ記載セル最大瀕壓ヲ超過シ或ハ場所ノ定限ヲ越エテ航行シ又ハ檢査官吏ノ命ニ違背シ修理セスシテ航行シ若クハ差止ノ命ニ違背シテ出航シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條　檢査證書ニ記載セル端船其他必要ノ所屬品ヲ備ヘス又ハ旅客定員ヲ超過シテ航行シ又ハ第十三條ヲ犯シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條　檢査官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ第十條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條　前三條ノ場合ニ於テ正當ノ事由アル者ハ其罪ヲ論セス

第二十條　第十一條第十二條第十四條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條　檢査細則及ヒ施行ノ手續ハ農商務卿之ヲ定ム

○第二十九號　明治十七年十二月廿二日達

今般第三十號布告ヲ以テ西洋形船舶檢査規則制定候ニ付テハ在來ノ船舶ハ明治十九年六月三十日迄ニ檢査ヲ受クヘシ

○鉄道棧橋繫船規則　明治十八年七月十日（工）第二十四號告示

第一條　凡船舶ヲ鐵道棧橋及錨標ニ繫泊セントスルトキハ船長或ハ其代理者ヨリ豫メ其旨ヲ神戸鐵道局運輸課長或ハ（時宜ニヨリ）其代理官ニ告ケ免狀受クヘシ

第二條　凡船舶ハ棧橋ニ於テ繫泊シ又ハ解纜スル爲メ必要ナル少時間ヲ除クノ外錨標ニ繫泊スルヲ許サス及風位天候ノ如何ヲ論セス總テ棧橋ニ來リ又ハ之ヨリ去ル船舶ノ妨害ヲ爲ス如キ接近ノ位置ニ繫スルヲ許サス

第三條　棧橋ニ繫泊スル船舶若シ之ヨリ離ルヘキコトヲ命セラレタルトキハ速ニ錨標ニ移ルヘシ再ヒ許可ヲ受クルマテハ棧橋ニ繫泊スヘカラス

但此場合ニ於テハ棧橋附屬ノ錨標ニ繫留セス直ニ去テ他船ノ棧橋ニ來去スルニ支障ナキ所ニ投錨スヘシ

第四條　鐵鎖綱繩其他繫泊ノ用具ハ其爲メ設ケタル方法ニ據ルニ非レハ棧橋ノ如何ナル部分ニモ附着スヘカラス

但船舶繫留ノ爲メ錨標錨柱等充分ノ備アレトモ若シ船體ノ大サ或ハ製造ノ形特別ナル船舶ニシテ別段ニ繫泊ノ器具ヲ要シ其旨ヲ報知スルトキハ鐵道局ニ於テ之ヲ設置スルヿアルヘシ

第五條　日曜日休暇日及暴風雨ノ日ヲ除キ平日業務時間ハ日出ニ始リ日沒ヲ以テ終ルモノトス

但神戸稅關長ノ許可ヲ受ケタル者ニ限リ特別ニ夜業ヲ許スコトアルヘシ

第六條　門戸ハ毎夜　時ニ閉ヘシ其後ハ何人タリトモ出入スルヲ許サス

第七條　縱令如何樣ノ事情アルトモ棧橋及鐵道構內ニテ瀝青潴（ピッチタール）等ヲ煮或ハ一切ノ火ヲ焚クヲ許サス

第八條　火藥ナイトロー、グリセリン石腦（ペトロリヤ）諸酸其他危險爆發質ノ物品ハ別段ノ許可ヲ受クルニ非レハ鐵道構內ニ荷揚スルヲ許サス總テ右等ノ物品ヲ積載スル船舶ハ棧橋或ハ錨標ニ來着ノ前ニ其由ヲ報告スヘシ

第九條　灰輕荷（ハラスト）石泥ノ差別ナク其他何品ヲ問ハス廢物ヲ船舶ヨリ投棄シ或ハ鐵道構內ニ荷揚スヘカラス而シテ棧橋或ハ錨柱ニテ無據輕荷ヲ積入ルヽ船舶ノ爲メ輕荷受ヲ備置キタレハ能ク注意シテ之ヲ用ユヘシ

第十條　棧橋ニテ荷揚スル船舶ハ自己ノ滑車ヲ用ユヘシ（格別ノ約束ニ依リ棧橋ノ千斤力（クラン）ヲ用ユルヿヲ得）而シテ諸荷物ノ損害雜費ハ船舶ノ鉤索滑車ヲ離ルヽマテ其船舶ノ擔當タルヘシ

第十一條　棧橋ニ繫泊セル船舶ノ長或ハ其代理者ハ神戸稅關規則ヲ嚴守スヘキヲ以テ若シ之ニ違犯シタルトキハ直ニ其船舶ヲシテ棧橋ヲ去ラシムヘシ

第十二條　棧橋或ハ錨標ヲ用ユル船舶ノ長或ハ其代理者ハ前ニ列記シタル規約ヲ遵守スヘシ其承認ノ證トシテ規約寫書下付ノ時受書ニ調印スヘシ

○幌內鉄道手宮棧橋繫船規約

明治十八年七月十五日
（農）第十五號告示

第一條　凡船舶ヲ棧橋及錨標ニ繫泊セントスルトキハ船長或ハ其代理者ヨリ豫メ其旨ヲ手宮停車場ヘ申出許可ヲ受クヘシ

第二條　凡ソ船舶ハ棧橋ニ於テ繫泊シ又ハ解纜スル爲メ必要ナル少時間ヲ除クノ外錨標ニ

繫泊スルヲ許サス又風位天候ノ如何ヲ論セス總テ棧橋ニ來リ又ハ之ヨリ去ル船舶ノ妨害ヲ爲ス如キ接近ノ位置ニ繫泊スルヲ許サス

第三條　棧橋ニ繫泊スル船舶若シ之ヨリ離ルヘキヨトヲ命セラレタルトキハ速ニ錨標ニ移ルヘシ再ヒ許可ヲ受クルマテハ棧橋ニ繫泊スヘカラス但此場合ニ於テハ棧橋附屬ノ錨標ニ繫留セス直ニ去テ他船ノ棧橋ニ來去スルニ支障ナキ所ニ投錨スヘシ

第四條　鐵道綱繩其他繫泊ノ用具ハ其爲メ設ケタル方法ニ據ルニ非レハ棧橋ノ如何ナル部分ニモ附着スヘカラス但石炭積取船ノ外ハ棧橋ノ極端ヨリ四百尺ノ間ニ繫泊スヘカラス

第五條　日曜日休暇日及暴風雨ノ日ヲ防キ平日業務時間ハ日出ニ始リ日沒ヲ以テ終ルモノトス

但神戸稅關長ノ許可ヲ受ケタル者ニ限リ特別ニ夜業ヲ許スヿアルヘシ

第六條　門戸ハ毎夜　時ニ閉ヘシ其後ハ何人タリトモ出入スルヲ許サス

第七條　縱令如何樣ノ事情アルトモ棧橋及鐵道搆內ニテ瀝青(ヒツチタール)諸等ヲ煮或ハ一切ノ火ヲ焚クヲ許サス

第八條　火藥ナイトロー、グリセリン石腦(ペトロリヤム)諸酸其他危險爆發質ノ物品ハ別段ノ許可ヲ受クルニ非レハ棧橋ニ荷揚スルヲ許サス總テ右等ノ物品ヲ積載スル船泊ハ棧橋或ハ錨標ニ來着ノ前ニ其由ヲ報告スヘシ

第九條　灰(バスト)輕荷石泥ノ差別ナク其他何品ヲ問ハス廢物ヲ船舶ヨリ投棄シ或ハ棧橋ニ荷揚スヘカラス

第十條　棧橋ニテ荷揚スル船舶ハ自己ノ滑車ヲ用ユヘシ

第十一條　棧橋ヨリ積卸貨物ハ手宮停車場ニ於テ定ムル所ノ棧橋使用料ヲ徵收スヘシ但棧橋ヨリ手宮停車場間ノ運搬ハ手宮停車場ニ於テ取扱フモノトス

第十二條　棧橋及ヒ錨標ニ繫泊スル船ノ爲メニ棧橋又ハ錨標ヲ毀損セシトキハ其修繕費ヲ償ハシムヘシ但天災非常ニ因リ毀損セシトキハ此限リニアラス

第十三條　棧橋或ハ錨標ヲ用ユル船舶ノ長或ハ其代理者ハ前ニ列記シタル規約ヲ遵守スヘシ其承認ノ證トシテ規約寫書下付ノトキ受書ニ調印スヘシ

勅詔

○蝦夷開拓ノ勅書　明治二年六月四日

蝦夷開拓ハ　皇威隆替ノ關スル所一日モ忽ニス可ラズ汝直正深ク國家ノ重ヲ荷ヒ身ヲ以テ之ニ任セン一ヲ請フ其憂國濟民ノ至情朕嘉納ニ堪ヘズ獨恐ル汝高年遽ニ殊方ニ赴ク一ヲ然レ共朕之ヲ汝ニ委ス始テ北顧ノ憂ナカラン仍テ朶務ヲ命ス他日

皇威ヲ北疆ニ宣ル汝方寸ノ間ニアルノミ汝直正懋哉（ツトメヨ）

明治十三年七月第三十三號
仝年十一月第五十一號
仝十四年十二月第六十六號
仝十八年三月第四號
仝年八月第十九號
仝年十二月第廿一號

○北海道諸産物出港稅則並各港船改所規則

明治十年八月十一日第五十六號布告

第一條　北海道諸産物（鑛屬穀類酒類麻卵紙生糸器具ヲ除ク）各府縣ヘ輸送ノ節ハ官私用（陸海軍用品ヲ除ク）ノ別ナク出港稅トシテ其原價百分ノ四ヲ貨主ヨリ下條ニ掲載スル一ノ船改所ニ納ムヘシ

但シ本文ノ稅金ハ船長ニ於テ取纏メ（外國船ヲ以輸送ノ節ハ貨主）納入ノ手續ヲ爲スヘシ

第二條　船改所有之各港

渡島國龜田郡函館港　同國松前郡福山港　同國檜山郡江差港
後志國小樽郡小樽港　同國壽都郡壽都港　釧路國厚岸郡厚岸港
根室國根室郡根室港

左ノ十六ヶ所ニ於テ毎年五月ヨリ十月マテノ間船改派出所ヲ置キ船改所同樣ノ事務ヲ取扱フヘシ

渡島國松前郡吉岡　同　國松前郡江良町　同　國爾志郡熊切
後志國古平郡古平　同　國岩內郡岩內　同　國余市郡余市
同　國久遠郡久遠　石狩國石狩郡石狩　天鹽國增毛郡增毛
同　國留萌郡鬼鹿　日高國浦河郡浦河　釧路國厚岸郡濱中
同　國釧路郡釧路　千島國紗那郡紗那　根室國花咲郡花咲

北見國利尻郡利尻

第三條　諸產物ノ原價ハ各港ニ於テ毎月上中下旬三度賣買相場ヲ蒐集シ之ヲ査定スヘシ

但シ相場詳カナラサル物品ハ賣買仕切狀ヲ檢査シテ之ヲ定ムヘシ

第四條　諸船舶各府縣下ヨリ北海道ヘ入船スルトキハ船免狀或ハ船稅鑑札ヲ添ヘ第一號書式ノ通其港津船改所或ハ地方役所（又ハ區戶長役場以下同シ）ヘ速ニ届出ヘシ

但北海道產物ニ類似ノ物品ヲ青森秋田兩縣下等ヨリ廻漕スル分ハ其品名數量ヲ詳記シタル仕切物ノ送狀或ハ賣買仕切狀ヲ添ヘ届出ヘシ

第五條　北海道各港津ヲ廻漕スル諸船舶ハ出帆ノ節甲港船改所或ハ地方役所ヘ申出改所役所ニ於テハ第二號書式ニ法リタル檢印帳ヲ付與シテ廻漕セシムヘシ其船乙港ヘ入津セハ乙ノ船改所或ハ役所ヘ速ニ檢印帳ヲ納メ置キ出帆ノ節乙港ノ檢印ヲ乞フテ携帶スヘシ（丙港ノ出入モ又之ニ準ス）

但シ廻漕數月ニ渉ル船モ該年中ハ一ノ檢印帳ヲ用ヒシメ翌年ハ更ニ之ヲ付與スヘシ

第六條　諸船舶北海道內ヨリ各府縣ヘ向ケ廻漕ノ節ハ第二條ニ掲クル各港ノ內何レカ一港ヘ入船シテ其船改所ヘ檢印帳ヲ還納シ第三號甲ノ書式ニ法リタル出港稅納目錄二通ヲ差出シ產物積載セサル節ハ第四號甲ノ書式ノ出帆届二通ヲ差出スヘシ改所ニ於テハ審査ノ

上產物積載セタルハ定則ノ稅金ヲ領收シ第三號乙ノ書式ニ法リ產物積載セサルハ第四號乙ノ書式ニ法リ奥書シテ一通ハ留置キ一通ヲ下付シテ出帆差許スヘシ

但シ許可ヲ得タル後ナ都合ニ依リ三日以內ニ出帆セサル船ハ更ニ其旨ヲ届ケ出ツヘシ

第七條　船改所ナキ地方ヨリ產物積取直ニ各府縣ヘ輸送セント欲スル者ハ其積受ノ地ヘ航行ノ節第二條ニ掲クル各港ノ內何レカ一港ヘ入津シ豫メ其積取ルヘキ產物ノ高ヲ計算シ第三號中ノ書式ニ法リタル出港稅前納目錄二通ヲ差出シ船改所ニ於テハ前納目錄ノ高ニ從ヒ定則ノ稅金ヲ領收シ同號乙ノ書式ニ法リ奥書シテ一通ハ留置キ一通ヲ下付シテ直航差許スヘシ

但シ本條許可ヲ得テ其地ニ到リ產物積取ノ節ハ其地方役所ニ申立檢査ヲ受クヘシ役所ニ於テハ出港稅前納濟ノ目錄ニ照較シテ之ヲ檢査シ若シ產物不足ノ節ハ其由ヲ詳記セル書面ヲ右目錄ニ添ヘテ船長ヘ下附シ船長之ヲ翌年七月マテニ襄キニ納稅ノ船改所ヘ差出スニ於テハ過納ノ金額下戻スヘシ

第八條　出港稅納濟ノ諸物產都合ニ依リ第二條ニ掲クル各港ノ內ヘ陸揚スルトキハ該港船改所ヘ願出スヘシ改所ニ於テハ現品審査ノ上稅納濟ノ目錄ヲ引上ケ稅金下戻スヘシ

但シ出港稅ヲ收納シタル港內ニ於テ難破ノ災ニ罹リ稅納濟ノ產物流沒シタル分ハ實際

檢査ノ上稅金下戻スヘシ

第九條　各港船改所及ヒ役所ハ休日ヲ除クノ外毎日午前九時ヨリ午後四時マテ船舶出入ノ事務取扱フヘシ尤モ諸貨物船積船卸ハ日出ヨリ日入マテヲ限トス

但臨時出入港ノ手數ヲ乞ヒ或ハ時限外ニ貨物ヲ積卸セント欲スル者ハ其事由ヲ具シ船改所或ハ役所ヘ願出ツヘシ

第十條　諸船舶出港稅未納或ハ納稅目錄外ノ產物ヲ窃ニ積載セ各府縣ヘ輸送セント謀リ又ハ府縣下ニ於テ陸揚スルモノハ科料トシテ船長ヨリ其物品原價（其發送スル地方賣買ノ價格ヲ以テ之レヲ定ム）十分ノ二及出港稅ヲ徵收スヘシ

第十一條　各港船改所及ヒ役所ニ於テハ毎船ノ出入ヲ審査シ若シ此規則ニ循ハサルモノアリテ其踪跡詳カナラサル片ハ開拓使ヨリ直ニ其船主ノ本管廳ヘ通報シ本管廳ニ於テハ出港稅及ヒ科料ヲ徵收シ其事由ヲ詳記シタル書面ヲ添ヘ同函館支廳ヘ送付スヘシ

但シ北海道廻漕中暴風等ノ難ニ罹リ止ムヲ得スシテ直チニ府縣下ヘ入船スルモノハ本條ノ限リニアラサル故其事由ヲ具シ檢印帳ヲ添ヘ速カニ其地方廳ヘ屆出スヘシ地方廳ハ事實篤ト取糺ノ上疑ナキニ於テハ其現存スル物品ノ出港稅（原價ハ其入船シタル地方賣買ノ價格ヨリ其運賃ヲ除キ之ヲ定ム）ヲ徵收シテ本文同樣送付スヘシ

第十二條　出入港ノ屆及ヒ檢印帳ノ納受ヲ等閑ニスルモノ或ハ許可ヲ得スシテ時限外ニ荷物ヲ積卸シスルモノハ左ノ算則ニ從ヒ船長ヨリ科料ヲ徵收スヘシ

日本形船　五十石マテ　金十五錢

五十一石以上十石毎ニ一錢ヲ加フ

外國形洋船　三十噸マテ　金五十錢

三十一噸以上十噸毎ニ十七錢ヲ加フ

同風帆船　三十噸マテ　金三十錢

三十一噸以上十噸毎ニ十錢ヲ加フ

第十三條　總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ訴出ル片ハ犯人科料ノ半額ヲ賞トシテ與フヘシ

第一號

入港御屆

船形

一船名

積高（何石何噸）

船主　何府縣管下何國何郡何所何之誰

乘組　船長外何人
積荷　目錄ノ通
仕出場及仕出場出帆月日
入港日
右御屆申上候也
明治　年　月　日
何港郡
船改所
役所
區戸長
御中

右船長
何之誰印

第二號
番號
檢印帳

船形
一船名
積高　何石何噸
船主　何府縣管下何國何郡何所何之誰
乘組　船長外何人
出港日
右北海道廻漕差許候也
明治　年　月　日

開拓使管下
何港郡何所

開拓使管下
何港郡何所

以下乙丙港出入檢印ノ書式

入港月日
出港月日

第三號
船形
一船名
船主何府縣管下何國何郡何所何之誰
乘組　船長外何人

〔北海道諸産物出港税則〕

積高　何石 何噸

出港稅納目錄

何郡出產

一品名　何百石　但百石ニ付金百圓相場

此代金何百何拾何圓何拾錢

此稅金何拾何圓何拾錢何厘　但代金百分ノ四

甲

何郡出產

一品名　何百何拾貫目　但何貫ニ付金何圓相場

此代金何十何圓何十何錢

此稅何十何圓何十何錢何厘　但代金百分ノ四

稅合金何十何圓何十何錢何厘

右之通出港稅金上納仕候間今明何日當港ヨリ(何國何郡ニ相廻リ同所ヨリ)何府縣何港へ出帆直航御差許被下度候以上

右船長

明治　年　月　日

何港

船改所

御中

何之誰印

前書之通產物出港稅金領收出帆直航差許候也

開拓使管下

何港船改所

官　姓　名印

乙

明治　年　月　日

第何號

第四號

出帆御届

船形

一船名

積高　何石 何噸

船主　何府縣管下何郡何所何ノ誰

甲　乘組　船長　外何人

仕向場

出港日

右御届申上候也

明治　年　月　日

何港

船改所

御中

右船長

何　之　誰印

乙

出帆査了

第何號

○北海道帆立身税則　明治十七年二月十六日　第四號布告

根室縣下千嶋國及北見國紋別常呂網走斜里ノ四郡ニ於テハ拾昆布税收獲高ノ現品一割ヲ徵收シ函館縣下渡島國松前郡ニ於テハ帆立身税收獲高ノ現品二割ヲ徵收ス但本年五月一日ヨリ施行ス

○北海道水産物禁例　明治十七年五月二日　第十二號布告

北海道ニ於テ納税スヘキ水産物ヲ取獲シ又ハ水産物ヲ有税品ニ製造セントスルモノハ其地ノ管廳ニ願出許可ヲ受クヘシ違フ者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其物品ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徵ス

○北海道臘虎膃肭獸獵禁制　明治十七年五月廿三日　第十六號布告

自今北海道ニ於テ臘虎幷膃肭獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照ラシテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ追徵ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵ス

但農商務省ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス

○北海道地租制限　明治九年十二月廿八日　第百六十一號布告

北海道地租ノ義當分地價百分ノ一ニ相定候事

第二編　裁判所構成及民事諸規則之部

第一章

○公議所ヲ開キ制度律令ヲ議セシムルノ勅　明治二年二月二十五日

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢シ國家治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政治ノ本億兆ノ賴トコロ以テ輕シク定ム可ラス今也公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜ク速ニ開

局シ局中禮法ヲ貴ヒ協和ヲ旨トシ心ヲ公平ニ存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ皇祖ノ遺典ニ基キ人情時勢ノ宜ニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之ヲ裁決セン

○國是ヲ諮詢スルノ勅書　明治二年四月二十二日

朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ揭ケ天地神明ニ質シ綱紀ヲ皇張シ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ルニ兵馬倉卒未タ其績ヲ底サス朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ慚ツ今ヤ乃チ親臨汝百官群臣ヲ朝會シ大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス是神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ宜ク腹心ヲ披キ肺肝ヲ表シ可否ヲ獻替スヘシ朕將ニ勵精竭力大ニ經始スル所アラントス汝百官群臣ソレ勗(ツトメヨ)哉

○訴答文例

明治十六年七月十七日第二百四十七號布告

第一卷　原告人ノ訴狀

第一章　原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條　訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書附ヲ取リタル後訴狀ヲ作ルヘシ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書附ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某(府縣)管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄居ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類若シ一戸ノ本主ニ非ラシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某ノ厄介ト記スヘシ

第二條　原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルモ亦妨ケナシトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フヘシ但此章原告外國人ナル片ハ本人名前本國職分及ヒ寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載スヘシ

第二章　代書人ヲ用フル事

第三條

第四條

第五條

○右第二章三ケ條ハ明治七年七月十四日第七十五號布告ヲ以テ代書人ヲ撰ミ代書セシムルト否トハ本人ノ情願ニ任セラレ訴答文例中之レト抵觸スル條々ハ總テ廢止セラレタルニ付キ略ス以下皆同シ

第三章　訴狀ノ定則ノ事

第六條　訴狀ヲ作クルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一　訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲スヘキ事件ヲ揭ケ文飾冗長ナラサルヿニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ蹤跡ナキ事件ヲ述フルヿヲ得ス

第二　一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ（附錄第一號ヲ見合ス可シ）

但外國人ノ爲メニハ第一章但書ヲ見ルヘシ

第三　訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルヿ能ハサルトキハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四　訴狀ハ十六行ニヌ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルヿヲ得ヘシ其日本飜譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手數料ヲ取立ツヘシ

第五　被告人ノ住所呼出ヲ受クヘキ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ルトキハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載スヘシ若シ八里以內ナルトキハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章　訴狀ノ書式ノ事

第七條　貸附米金等淹滯ノ訴狀

貸附米金等淹滯ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ（附錄第二號ヲ見合スヘシ）

田畠ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

但以下十九條迄原告外國人ナルトキハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明ニ記載スヘシ

但附錄第十八號ヲ見合スヘシ

第八條　預ケ米金淹滯ノ訴狀

預ケ米金淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送リ金ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

第九條　賣掛代金淹滯ノ訴狀

賣掛代金淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證印アルヿヲ記入シ次ニ違約淹滯シタル事情ヲ書スヘシ（附錄第三號ヲ見合スヘシ）

第十條　手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限內ニ殘金ヲ渡サントスルトキニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サヽルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取ルヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ（附錄第四號ヲ見合スヘシ）

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ到リ殘金ヲ受取ルヘキトキニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サヽルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡スヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ（附錄第五號ヲ見合スヘシ）

第十一條　受負料淹滯ノ訴狀

諸職業受負淹滯ノ訴狀モ住所氏名ノ次ヘ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

第十二條　奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿內ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取還サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿內ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀又本條ニ照ラス可シ奉公又ハ弟子奉公人ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滯ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條　專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留ヘントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受ケタル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書スヘシ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨ケアルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル

事ヲ訴フルヿヲ得ス

第十四條　商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴フルヿヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ摸樣ニ付キ各種ノ本條ニ照スヘシ

先キニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヿアルヲ以テ之ヲ訴ルヿヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヿヲ得サルノ法ト相抵觸スルヿナカルヘシ（第十三條ヲ見合スヘシ）

第十五條　夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場ヘ屆置キタル籍戸人別ヲ寫載シ次ニ離姻ヲ爲スヘキ原由ヲ書スヘシ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母、祖父母アラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ內二人以上ノ奥書連印ヲ爲スヘシ（附錄第六號ヲ見合スヘシ）

原告人妻ナルモ前條ニ照ラシテ其父母親族等ヨリ訴フヘシ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告クルニ暇ナキトキハ自ラ訴フルヿヲ得ヘシ

第十六條　養子女離別ノ訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女ト爲シタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ別ニ離別スヘキ原由ヲ書シ原告人親族アラサレハ近隣又ハ朋友ノ內二人以上ノ奥書連印ヲ爲スヘシ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照スヘシ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴フルヿヲ得ヘシ養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第十七條　家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被双方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續スヘキ條理ト被告人相續スヘキ條理ナキヿヲ書スヘシ（附錄第六號ヲ見合スヘシ）

第十八條　田畑山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照スヘシ

田畑山林建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價ヲ受取ラントスル訴狀モ第十條第二項ニ照ス

ヘシ

第十九條　經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄕村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書スヘシ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱書スヘシ

繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用フヘシ（附錄第七號ヲ見合スヘシ）

但シ第七條但シ書ヲ見ルヘシ

第二十條　被告ノ訴狀

原被告人豫審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控訴セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟廷ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得ヘキニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト應決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出ヘシ（但書ハ明治八年第九十三號布告控訴上告手續ニ因テ削除シ第二項ハ同年第九十一號布告上等裁判所章程第一條ニ因テ削除ス故ニ之レヲ略ス）

第五章　一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止マルヘキ事

第二十一條　原被告人共人員多少ニ拘ハラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ルヘシ又原告人一名ニシテ仝時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ルヘシ

第六章　一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ル事

第二十二條　貸借ニ事以上ニシテ原被告人共別人ニ非ラサレハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ヘシ

第七章　原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條　債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フヘシ若シ債主、連名三人ナルヲ一人ニシテ訴フルトキハ他ノ二人ヨリ依賴ノ證書ヲ以テ訴フヘシ（附錄第八號ヲ見合スヘシ）

第二十四條　債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章　連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條　負債主連名ノ借用證文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ盡ク相手取ルヘシ

第二十六條　負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記

シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ（附錄第九號ヲ見合ス可シ）

第二十七條　負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任スヘシ

ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任スヘシ

第九章　讓證文ヲ以テ訴フル事

第二十八條（本條及ヒ次條ハ但書ヲ除クノ外明治九年七月六日第九十九條布告ニ因テ別ラル故ニ略ス）

第二十九條

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得ヘシ

（司）第九十九號　明治九年七月六日告示

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓與スルトキハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換シメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之トキ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス

但相續人ヘ讓渡候ハ此限ニアラス

第十章　代言人ノ事

第三十條

第三十一條

第三十二條

（本章ハ明治九年二月二十日第十八號布告ヲ以テ刪除ス故ニ之レヲ略ス）

第二卷　被告人ノ答書

第一章　答書ノ定則ノ事

第三十三條　答書ヲ作クルニハ左ノ定則ニ循フヘシ

第一　被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ルトキ原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フヿヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ（第四十七條及第四十八條ヲ見合スヘシ）

第二　原告人ノ述フル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書スヘシ

第三　答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アルヘシ（附錄第十三號ヲ見合スヘシ）

第四　答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用フヘシ若シ本人自署スルヿ能ハサルトキハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第五　答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ

第二章　代書人ヲ用フル事

第三十四條　（此章ハ明治七年第七十五號布告ヲ以テ刪除ス故ニ略ス）

第三章　代言人ノ事

第三十五條

第三十六條

第三十七條

（此章ハ前卷第十章ト同ク削除ス故ニ略ス）

第四章　原告人ノ返リ證書ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條　負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還附セサルヲ以テ二重ノ催促ヲ爲ス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ證文（返リ證文ハ債主ヨリ原ノ証書ヲ還附セスシテ其米金受取ノ証書ヲ交付スルヲ云フ）ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書スヘシ

第三十九條　原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ證據トスヘキ證跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做スヿヲ得ス

第五章　原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條　借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札（對談一札トハ返濟延期ノ證書ヲ云フ）アルヿヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルヿヲ書スヘシ

第四十一條　負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル原由アルトキハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證ト爲スヿヲ得ス

第六章　原告人證書ヲ僞造シタル答書ノ事

第四十二條　被告人ノ證書ヲ原告人僞造シタル答書ハ其僞造ヲ證スル爲ニ管轄町村ノ役場ニ屆ケ置キタル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書スヘシ

第七章　經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條　國郡鄕村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照スヘシ

第八章　既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條　負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債

主ヨリ受取ルヘキ米金アリテ其受取ルヘキ期限モ亦過キ未タ訴ヘスト雖ヒ双方均ク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ニ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ルヘキ米金ノ證書ヲ寫戦シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書スヘシ

第四十五條　負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答フルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲スヘキ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センヿヲ答フルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ラス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章　對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條　被告人訴狀ニ對シ辨解スルヿ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十四號ヲ見合スヘシ）

第四十七條　前條ノ場合ニテ貸借滯滯ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ定約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照スヘシ

第十章　對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條　原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十五號ヲ見合ス可シ）

第十一章　對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條　原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センヿヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十六號ヲ見合スヘシ）

第十二章　對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條　原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センヿヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ爲サシムヘシ（附錄第十七號ヲ見合スヘシ）

訴答文例附錄

第一號

訴狀表紙ノ式（美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユヘシ）

年月日

某訴狀

住所
身分
氏名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ滯滯ヲ訴フルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類

訴狀ノ式

某訴

原告人　住所
身分
氏名

被告人　住所
身分
氏名

標記云々

右原告人氏名申上候私義云々

年月日

某　氏名印
御裁判所　住所
身分
代書人　氏名印

（司）第三百十二號　明治六年九月七日告示

訴答文例附錄中訴狀宛所某御裁判所ト有之處每號トモ同第十八號書式ノ通リ相定ム

第二號

貸金催促ノ訴狀

〔訴答文例〕

原告人　住所
身分
氏名

貸金催促ノ訴

一元金何圓（年月日貸附年月日期限）
一利金何圓　一年又ハ一月幾分ノ利
合何圓
右證文ノ寫左ノ如シ
借用證文
一金何圓
右云々

住所
身分
被告人　氏名

借主
氏名
證人
氏名

第三號

賣掛代金滯ノ訴狀

住所
身分
氏名印

貸主
名當

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

住所
身分
代書人
氏名印

某
御裁判所

賣掛代金滯ノ訴

原告人　氏　名

住所
身分
被告人　氏　名

一金何圓
右賣掛帳ノ總計高ニ御座候
但帳面ニ被告人ノ證印有之候
若シ賣掛帳ニアラスシテ證文ナレハ其證文全文ノ寫ヲ出スヘシ

氏　名　印
住所
身分
代書人　氏　名　印

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

第四號

某　御裁判所

買附米引渡違約ノ訴狀

住所
身分
原告人　氏　名

住所
身分
被告人　氏　名

買附米引渡違約ノ訴

一米何石（年月日買取約定濟此度受取ルヘキ石高）
代金何圓（一石ニ付何圓換）
內何圓年月日手付金トシテ渡濟
殘何圓年月日限現米引替ニ渡スヘキ約定

右約定證書ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

第五號

賣附生糸代金引渡違約ノ訴狀

住所
身分
原告人　氏名

賣附生糸代金引渡違約ノ訴

某　御裁判所

住所
身分
代書人　氏名印

氏名印

一金何圓（年月日限生糸引替ニテ受取ルヘキ殘金高）

元金何圓（年月日生糸何斤賣附約定ノ金高）

但何斤ニ付何圓替

內何圓（年月日手附トシテ受取濟）

右約定證ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

被告人　氏名

住所
身分

氏名印

某

住所
身分
代書人　氏名印

氏名印

第六號

妻離別ノ訴狀

御裁判所

原告人　氏名　住所　身分

被告人　氏名

妻離別ノ訴

夫　氏名當何歳

妻　氏名當何歳年月日娶ル

某御役所ニ差出置候年月日ノ戸籍人別帳ノ寫左ノ如シ

人別帳

第七號

【訴答文例】

經界ヲ爭フ繪圖ノ式

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

氏名印

住所

身分

代書人　氏名印

前書申上候處相違無御座候

年　月　日

住所

身分

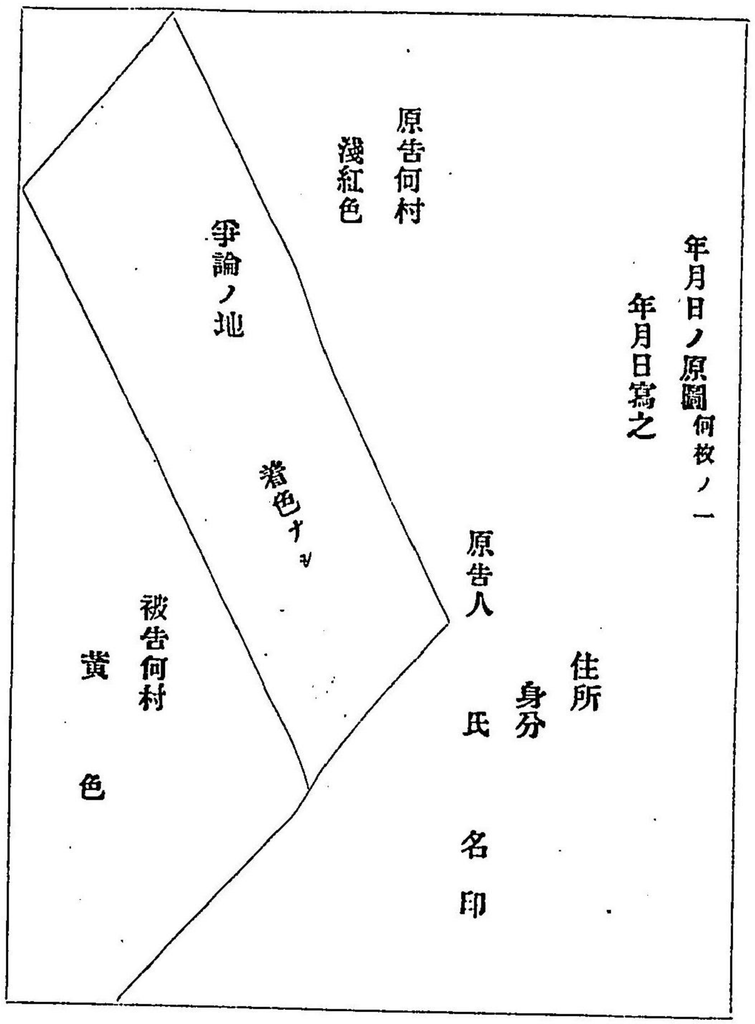
原告人ノ祖父母父母等　氏名印

某

氏名印

御裁判所

年月日ノ原圖何枚ノ一
年月日寫之



住所
身分
原告人　氏名印

第八號

原告人三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴狀

住所
身分
原告人　氏名

住所
身分
被告人　氏名

某ノ訴

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

氏名印
住所
身分

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申筈ニ御坐候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何ノ誰ヘ總代相頼候然ル上ハ何ノ誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上間敷候爲後證奥印仕候

代書人　氏　名　印

年　月　日

住所
身分
氏　名　印

住所
身分
氏　名　印

某　御裁判所

代書人　氏　名　印

第九號

被告人連名中脫走又ハ病死人アルノ訴狀

住所
身分
原告人　氏　名

住所
身分
被告人　氏　名

元住所
身分
被告人　氏　名

右何ノ誰ハ年月日脫走致候段何町村役人何ノ誰ヨリ承知仕候

某ノ訴

右原告人氏名申上候云々

年　月　日

某

御裁判所

住所
身分
被告人　氏　名

右何ノ誰ハ年月日死亡致候段
何町村役人何ノ誰ヨリ承知仕候

氏　名　印
住所
身分
代書人　氏　名　印

第十號
讓證文ヲ以テ催促スル訴狀（此一號ハ明治九年第九十九號布告ヲ以テ消滅ス故ニ略ス）

第十一號
代言人ヲ頼ム訴狀

第十二號
一時假リノ代言人ヲ出ス證書

（右兩號ハ明治九年第十八號布告ニ因テ消滅ス故ニ略ス）

第十三號
答書表紙ノ式（用紙寸法第一號訴狀ノ法ノ如シ）

年　月　日

某ノ答書

住所
身分
氏　名

答書ノ式

〔訴答文例〕

某ノ答書

右住所身分何ノ誰何々儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕御答申上候

私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ

右之通御座候

年　月　日

住所
身分
被告人　氏　名

某　氏　名印

住所
身分
代書人　氏　名印

第十四號

御裁判所

對決前熟議解訟ノ答書

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人ヘ熟談濟方仕候趣申上候

私儀云々

年　月　日

住所
身分
被告人　氏　名

氏　名印

住所
身分

前書被告人何ノ誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不願奉候

代書人　氏　名

年　月　日

住所
身分
原告人　氏　名印

住所
身分
代書人　氏　名印

某

御裁判所

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人ヘ熟談ノ上濟方日延約定仕候段左ノ通リ御座候

私儀云々

年　月　日

住所
身分
被告人　氏　名

住所
身分
氏　名印

代書人　氏　名印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日マテ御裁斷御猶豫奉願候

住所
身分

年月日

原告人　氏　名印
住所
身分
代書人　氏　名印

某

御裁判所

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所
身分
被告人　氏　名

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答
右住所身分何之誰何々之儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人
へ熟談ノ上親族朋友中何ノ誰ヨリ日延代償約定仕候段左ノ通リ御坐候
私儀云々
年月日

氏　名印

前書被告人何ノ誰申上候通リ私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段相違無御坐候

住所
身分
代書人　氏　名印

年月日

住所
身分
代償人　氏　名印

前書被告人何ノ誰申上候通私共承諾仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所
身分
代書人　氏　名印

年月日

住所
身分
原告人　氏　名印

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

某

御裁判所

代書人　身分
氏　名　印

被告人　住所
身分
氏　名

某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人へ熟談之上親族朋友中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左ノ通御座候

年　月　日

住所
氏　名　印
身分

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段相違無御坐候

年　月　日

代書人　氏　名　印

代償人　住所
身分
氏　名　印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上何ノ誰ヨリ代償濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

年　月　日

代書人　住所
身分
氏　名　印

原告人　住所

第十八號

外國原告人ノ訴狀

某

御裁判所

代書人　身分
　　氏　名　印

本國住所
原告人　身分
　　氏　名
住所
被告人　身分
　　氏　名

訴狀

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所ヘ左ノ通訴訟申上候

第一云々

但シ訴訟ノ根源事實ノ大略ヲ明白ニ認ムヘシ若其事實混交シテ長文ナルトキハ第一第二第三條ト之ヲ區別スヘシ

第二云々

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所ヘ云々被成下度願上候事

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト認メ其他公正ノ御裁判ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ

日本地名
年　月　日

原告人　氏　名　花　押
若シ原告ノ代言者ナルトキハ左ノ如ク加判スヘシ
代言者　氏　名　花　押

某
裁判所長
氏　名

○華士族平民身代限規則

明治五年六月二十三日第百八十七號布告

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

〔華士族平民身代限規則〕

一時服着替共男女共各二通宛
一夜具　男女共各一通宛
一本人ノ職業ヲナスニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事
一食料
家族ノ人口ヲ量リ一ケ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置クヘキ事
但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事
一鍋釜及炊具各一通
華士族身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類
一家祿（此類ハ五年第三百二十七號布告ヲ以テ取消ス）
但人口ヲ量リ年々飯米ヲ引殘シ其余分ナキカ或ハ不足ノ者ハ其半高ヲ返金濟迄金主ヘ渡サセ候事

一大小類　男子一人ニ付　各一腰宛
一冠服　男子一人ニ付　各一通宛
一時服着替共　男女共　各二通宛
一夜具　男女共　各一通宛
一本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品
但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事
一鍋釜及炊具類　各一通
右身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅ヘ掲示ヲ出シ其次第傳承日限中
追願ノ者ハ取糺ノ上可處置事
但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ
一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヿヲ得ヘシ
但現在着用ノ衣類夜具ハ此限ニアラス

〔華士族平民身代限規則〕

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤モ金銀器等ノ定價判然タル物品ハ其價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總類ハ其者ノ負債及ヒ右一件諸費用ヲ償フニ過クヘカラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ掲示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニ取立裁判所ヘ差出ス可シ

(司)第七十一號 明治七年七月三日布告

明治六年(五月)第百八十一號布告身代限掲示案左之通改正ス

何町村 何之誰

右之者儀何町村何ノ誰ヨリ何々其事目ヲ掲ク出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何之誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日内ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代限分散金ノ分配ニハ不差加者也

第二百七十五號 明治五年九月十八日達

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フ筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滯訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此旨相達ス

(司)第八十八號 明治六年三月五日達

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通相定メラル

僧侶身代限規則

抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ケ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一建物

法用ニ必要ナル個處

但本堂等ヘ建添候トモ榮耀ニ屬スル個所ハ此限ニアラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分
一法衣寺主并所化及尼共各一通宛
一時服着替共寺主并所化及婦女共各二通宛
一夜具寺主并所化及婦女共各一通宛
一鍋釜及炊具類各一通
一本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

(司)第八十九號 明治六年三月五日達

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ
一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分并ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
一右二帳二部ツヽ相綴リ檀家法類共両人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之ニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏クヘシ

(司)第二百五十二號 明治六年七月十七日達

負債者身代限ニ遇フ節其者ニ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ノ分處置振左之通定ム

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得ヘキ者定約期限未滿内ニハ訴出スルヿヲ許サヽル規則ナレ𪜈其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルヿヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受クルヿヲ得ヘシ

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置キタル者ハ本人身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ケ尚ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人證人ニ掛リ之ヲ訴ルヿヲ得ヘシ（八年百二號布告ヲ兒合スヘシ）

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スルトキハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ムルヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ

違變ナキヲ證明シ原告人之ヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルコルヲ得ヘカラス

第六條　定約期限未滿內ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿內ニ訴ルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置キタル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルヿヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲スヿヲ拒ムヲ得ヘカラス

第七條　動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ內ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ

第八條　引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿內ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ルヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

第五十號　明治十八年四月十日布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主掲示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員両名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置後日債主願出次第相渡スヘシ

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

(司)第九號　明治五年九月十三日布達

凡ッ動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告双方ノ內一方ノ者負公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決シ直ニ濟方不相成候時ハ身代限ノ方法ヲ執行可致候事

(太)第十二號　明治十五年二月四日達

貸下金其他諸上納金未納ノ者他ノ負債ノ爲メ裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ自今左ノ通處分スヘシ

一貸下金其他諸上納金未納ノ者裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ其徴收ヲ取扱フ官廳ニ於テ通常公文用紙ニ未納ノ金額ヲ記載シ證書ノ寫ヲ添ヘ之ヲ其裁判所ニ請求スヘシ

一裁判所ニ於テハ該請求ノ金額ニ就テ負債者異論ナキ件ハ身代限ノ配當金ヲ不足アル件ハ定例ノ通證書ノ上ニ取書其裁判所所在ノ郡區長ニ交付シ郡區長ハ之ヲ其官廳ニ送達スヘシ

(司)第廿三號 明治七年九月四日達

金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ內他人ヘ貸付置キタル金穀ノ證文之レアル節ノ取扱振明治五年第四十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之左ノ通改正ス

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ內ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス證文ニ記名シタル負債主ヘ眞僞ヲ尋ヲ無相違時ハ其負債主ヨリ證文面ノ通リ可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ證書ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

但シ定約期限ノ證文マテ負債主ノ家產些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ其負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ證文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シ其ノ落札ノ證文ニハ一通每ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ已レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ證文ニ記載シアル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ屆出ツヘキ事

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ證文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサル件ハ證文ニ記名シタル負債主ヨリ證文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時發ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人已ニ身代ヲ持直シタル件ハ直ニ其

人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

證文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此證文ハ入札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ某府縣管下某國某郡某町村何ノ誰ヘ相渡候條此證書ノ金額ハ右何ノ誰ヘ濟方致候上其當裁判所ヘ可屆出事

年　月　日　　某裁判所

(司)丁第十一號　明治十六年三月三日達

身代限分配加入訴ノ義ニ付別紙ノ通長野治安裁判所伺ニ對シ及指令候

但該指令ニ抵觸スル從前ノ指令內訓ハ自今消滅シタル義ト可心得

長野治安裁判所伺　明治十六年二月十七日

治安裁判所ニ於テ金額百圓未滿ノ訴件身代限處分中金額百圓以上ノ債主其分配加入ヲ始審裁判所ヘ出訴シ其權義確定セシ后該件ヲ受付シ來ルヲ以テ治安裁判所ハ之ヲ併セ其處分ヲ爲ス右治安裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケタル原被告ハ他ノ債主ヨリ始審裁判所ヘ金額百圓以上ノ訴ヲ爲セシヿヲ知得サル以前ニ在テハ（始審裁判所ヨリ金額百圓以上ノ訴件ヲ受付サルカ又ハ原被告ヨリ他ニ分配加入ノ事件アルトノ申述ヲ聽クニ非レハ）他ニ分配加入ノ訴ノ之レナキ者トナシ期ニ至リ分配處分濟ノ後始審廳ヨリ該件ノ到達スル如トキハ多少官民ノ手數錯雜スルノナミヲス隨テ費用ヲ要ス前顯ノ場合金額百圓未滿ノ訴件治安裁判所ニ於テ身代限處分中同負債者ヘ掛リ其分配加入ノ訴ヲ爲サント欲スル者ハ其處分ヲナス治安裁判所ヘ直ニ出訴セシメ其治安裁判所ハ該分配事件ニ限リ金額百圓以上ト雖モ都テ之ヲ受理シ判決ヲ與フヘキハ之ヲ與ヘ而シテ該裁判權ハ始審裁判所ニ於テ裁判セシモノト同一トナシ其裁判不服ナルトキハ直ニ上等ナル控訴裁判所ヘ控訴スル權ヲ有セシメナハ實際便益不少ノミナラス明治十四年第八十三號御布告ノ權限ニモ敢テ抵觸セサル儀ト被考候條治安裁判所ニ於テハ身代限分配加入ノ訴ニ限リ金額百圓以上ト雖モ受理審判致不苦哉此段相伺候至急何分ノ御指令奉仰候也

指令　明治十六年三月五日

伺ノ趣身代限分配加入ノ件ハ金額ノ多寡ニ拘ハラス明治七年第七十一號布告掲示案ノ旨趣ニ依リ身代限ノ處分ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ受理スヘク若シ其事件裁判ヲ要スルニ至ルトキハ明治十四年第八十三號布告ノ權限ニ照ラシ之ヲ管轄裁判所ニ送付シ其裁判ヲ受ケシメタル上身代限ヲ爲シタル裁判所ニテ分配ヲ爲スヘキモノトス

○第百二號　明治八年六月二日布告

〔身代限處分規則、布達〕

明治六年(六月)第百九十五號布告金穀貸借請人證人辨償規則本年十月一日ヨリ左之通改正施行ス

金穀貸借請人證人辨償規則

第一條　金銀借用返濟相滯リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分請人證人ヘ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人證人ヘモ身代限申付其上不足相立候ハヽ借主並ニ請人證人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條　借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人證人ヘ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハヽ請人證人ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條　身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雛形之通裁判所ニ於テ其原證文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ヘ可相渡置事

裏書雛形

第一條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓相滯ルニ付借主何ノ誰身代限申付ル處不足相立請人證人何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百何拾圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何拾圓ハ借主何ノ誰請人證人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年　月　日

某裁判所印

第二條ノ節書式

表書ノ元利金何百何十圓借主何之誰死去逐跡相續人無之ニ付請人證人何ノ誰ヘ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百何十圓ニ相成ニ付右受取殘リ何百何十圓ハ請人證人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致者也

年月日

某裁判所印

○第百二十一號　明治八年七月廿二日布告

本年六月第百二號金穀貸借請人證人辨償規則布告本文中施行ノ二字ヲ削リ且ツ候條ノ下ニ同日以後借用證書ヘ加印候者ハ改正ノ通可相心得ノ二十二字ヲ加フ

但右規則第二條ノ節書式文中失踪ノ二字逃亡ト改正候事

(內)乙第八十六號　明治十年九月廿二日達

人民身代限ノ節區入費ノ義ハ國稅縣稅ニ亞キ先取ノ權有之候得共自然身代限ノ上尙區入費ノ不足有之候共身代持直次第償却致サセ候ニ及ハス其區ノ損失ニ可相立者トス

(司)丁第二十五號　明治十八年十一月十二日布達

始審裁判所　治安裁判所

[身代限處分規則、布達]

民事裁判上ニ於テ華族及華族ノ子弟ヲ身代限處分ニ及ヒタル者有之候ハヽ處分完結ノ上其旨直ニ宮内省華族局ヘ通牒致スヘシ

●千葉縣ヨリ身代限財産取調及公賣ノ節原被告立會ノ儀ニ付司法省ヘ伺　明治十六年七月五日

一身代限財産取調及公賣ノ節原被告ニ於テ立會スヘキ成規ハ無之候得共右ハ各自ノ利害ニモ關シ候ニ付自ラ立會候ハ妨ケ有之間敷且千葉始審裁判所ニ於テハ原被告連署ノ書面ヲ徵シ來リ候趣ニ有之然ラハ財産取調及公賣ノ當日雙方立會候ハ勿論ノ儀ニ付之ヲ執行スル郡長又ハ戸長ヨリハ原被告ヘ立會ノ儀特ニ達スルニ及ハサル儀ト心得可然哉

一果ノ然ラハ財産取調及公賣ノ節原被告雙方若クハ其一方ノ者出會セサル場合ニ於テハ之ヲ執行スル郡長又ハ戸長ニ於テ直ニ其處分ヲ完結スルモ妨ケ無之哉

一人民相互ノ訴訟ニヨリ抵當物公賣ニ付テモ前二項ノ通心得可然哉右相伺候也

指令　明治十六年七月十九日

伺之趣左ノ通

第一項　立會ノ義ハ達スルニ及ハスト雖モ財産取調及公賣ノ期日ハ報告スヘキモノトス

第二項　財産取調ノ節被告人立會サルトキハ家族又ハ隣佑ノ者ヲシテ立會シムヘシ原告人立會サルトキハ其儘ニシテ取調ヲ爲スヿヲ得財産公賣ノ節ハ原被共立會サルヿト雖モ其處分ヲ了スルヲ得ヘシ

第三項　抵當物公賣ニ付テモ身代限財産公賣ト同樣心得ヘシ

●栃木縣ヨリ身代限財産取調ノ義ニ付司法省ヘ伺　明治十六年九月十日

身代限財産調ノ際本人ハ勿論家族親族及隣家ノ者マテ立會ヲ拒ムトキハ戸長ニ於テ直ニ取調可然哉至急御指揮ヲ乞

指令　明治十六年九月十九日

身代限財産調ノ義ニ付伺ノ趣ハ見込ノ通タルヘシ但戸長ニ於テ財産調書ニ本人等立會ヲ拒ムニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

●札幌縣ヨリ身代限財産ノ儀ニ付司法省ヘ伺　明治十七年四月廿九日電報

身代限財産ノ内證券印紙墨紙郵便切手等所持スル者アリ右公賣ニ附スヘキヤ又ハ義務者ヨリ願出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ

指令　明治十七年五月廿三日

身代限財産ノ取扱ニ付四月廿九日付伺ノ證券印紙墨紙ハ地方廳ニテ原價ト引換郵便切手ハ驛遞本分局ヘ廻シ郵便條例第三十六條第三十七條ノ處分ヲ請フヘシ

●山梨縣ヨリ寺院身代限ノ義ニ付司法省ヘ伺　明治十七年六月廿四日

寺院ニ於テ其寺院用ノ爲メ金穀ヲ負債シ期限ニ到ルモ返償ナラス竟ニ訴訟ノ末身代限被申付タリ然ルニ寺院身代限財産取調方ハ是迄類例モ無之候ヘ共明治六年第八十八號公布僧侶身代限規則ヲ適用調査候義ト心得可然哉

若シ神社ニ於テ前項ノ場合ニ遭遇スルトキ其財産ハ何等ノ手續ニ據リ調査スヘキ儀ニ候哉

指令 明治十七年七月九日

伺ノ趣社寺身代限ニ付財産取調ノ手續ハ通常ノ規則ニ準スヘク其低償トシテ差押フ可ラサル物件ハ左ノ通心得ヘシ

一 神体佛像及其附屬物

二 社寺附除税地

三 寶物古文書類

但別段ノ由緒アル地所建物ハ本文ニ準ス

四 特別ノ契約アル寄附物

五 祭祀法用ニ必要ナル建物及什物

●佐賀縣ヨリ身代限財産調ノ義ニ付司法省ヘ伺 明治十六年十月八日

身代限財産取調ニ際シ無故其取調ヲ差拒ミ候者アルトキハ裁判執行ヲ拒ム者ニ付戸長ヨリ直チニ裁判所ヘ出訴爲致來候處官執第七十一號栃木縣伺ニ對スル御指令ニ依レハ身代限ノ處分ヲ受クル本人ハ勿論其家族親族及隣佑ノ者ニ於テ立會差拒ミ候場合ニ於テハ戸長直ニ取調ノ手續ヲナシ其旨調書ニ付記可致旨ニ有之聊疑義相生候ニ付爲念此段相伺候也

追テ裁判所ヘ出訴ヲ要セス戸長ニ於テ直ニ調査スル義ニ候ハヽ若シ本人又ハ代理人等ニ於テ其調査ニ故障ヲ唱差拒候節ハ戸長ヨリ直ニ警察官ノ公力ヲ要スル義ニ候哉又ハ此場合ニ於テ裁判官ヘ通知スル義ニ候哉合セテ御指令相成度候也

指令 明治十六年十月三十一日

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アルトキハ戸長ニ於テ直ニ警察官ニ對シ公力ヲ要求スルヿヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシ

但栃木縣伺ニ對スル指令ハ立會ヲ差拒ム場合即チ立會サル時ノ處分ヲ示シタル者ト心得ヘシ

●和歌山縣ヨリ身代限ノ儀ニ付司法省ヘ伺 明治十六年十月廿三日

第一條 爰ニ刑事ニ關シ乙ヨリ甲ニ對シ告發ヲ爲シ裁判所ニ於テ豫審ノ末無罪ノ申渡ヲ受ケタル者アリ因茲甲ハ之ヲ被告トシ損害要償ノ訴ヲ爲シ乙ハ其損害ヲ償フヘキノ申渡ヲ受ケタリ然ルニ乙ハ其償ヲ爲サス財産ノ幾分ヲ長男丙（同籍中ノ者ニシテ未タ戸主ノ地位ヲ讓ラス單ニ財産ノ幾分ヲ讓

與ス）ヘ讓與シタル後損害金ノ幾分ヲ償却シ其不足金渡シ方延日ヲ求ムルモ甲之ヲ肯ンセス終ニ裁判執行ノ訴ヲナシ原被示談身代限ノ申立ヲ爲セリ右身代限財產處分ノ上償金ニ不足ヲ生スルモ襲ニ丙（長男）ヘ讓渡シタル記名ノ財產ニハ及ホサヽル儀ニ候哉

第二條　前同樣ノ事實ナル無記名ノ財產ハ戶主ノ身代限ニ組入ルヘキ義ニ可有之哉

指令　明治十六年十一月十日

伺ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條　償金ニ不足ヲ生スルトキハ甲ハ丙ニ對シテ更ニ辨濟ノ請求ヲ訴フルヲ得ヘシ

第二條　見込ノ通

●三重縣ヨリ戶主身代限ノ際非戶主財產處分ノ儀ニ付司法省ヘ伺　明治十六年十一月十九日

官報第百四號中ニ佐賀縣ヨリ戶主身代限ノ際非戶主ノ財產處分ノ義御省ヘ伺指令登載有之右御指令ニ家族ノ財產ハ其同居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戶主ノ財產ニ組込ヘキ者トストアリ然ルニ村邑僻地ニ至テハ伯叔父母兄弟等藉ヲ分タスシテ別居シ毫モ本家ノ保護ヲ受ケスシテ活計ヲ營ミ自力ヲ以テ產ヲ興シ恰モ一戶獨立ノ姿ヲ爲ス者往々有之若シ是等ノ者ヲシテ戶主ノ身代限ニ連及セシムルモノトセハ多年ノ盡力一朝水泡ニ屬シ甚憫諒スヘキモノアリ右等ノ如キ單ニ戶主ト其藉ヲ同フスルノミニテ其實絕テ本家ト經濟ノ關係ヲ有セス一家獨立ノ姿ヲ爲ス者ハ其所有ヲ證スルニ足ルモノニ限リ戶主ノ財產ニ組込マサル儀ト心得可然哉

指令　明治十六年十二月十二日

伺ノ趣別居生計ヲ立ルト雖分籍セサル者ノ財產ハ公證記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戶主ノ財產ニ組込ムヘキモノトス

●福嶋縣ヨリ賠償金取扱方手續之儀ニ付司法省ヘ伺　明治十七年五月廿八日

第一條　戶長役場ニ於テ人民ヨリ徵收シタル租稅金ノ內盜難及村吏私借引負等ニ係ル分賠償方當時其筋ヘ及起訴置後日犯人處刑該金員納付スヘキ旨宣告相成候モ本人資力無之カ又ハ等閑ニシテ上納致サヽルトキハ其筋ヘ對シ身代限ノ處分ヲ請求スヘキハ勿論ニ可有之候ヘ共該處分ノ上賠償金額ニ不足ヲ生スルトキハ身代持直シ次第可致上納旨ノ證書爲差出追テ徵收候義ニ可有之哉

第二條　前條身代限處分ノ際ト雖先取ノ特權ヲ有スル義ト相心得可然哉

指令　明治十七年八月二十日

伺ノ趣左之通可心得事

第一條　賠償金ノ不足ハ裁判所ヨリ明治八年第百二號布告證文裏書雛形ニ準シ身代持直

次第皆濟ヲ受ク可キ旨ノ書面ヲ渡ス可キニ付追テ其書面ニ依リ還納ヲ受ク可キ義ト心得ヘシ

第二條　先取ノ特權ナキモノト心得ヘシ

●愛媛縣ヨリ戸主身代限財産糶賣ノ義ニ付司法省ヘ伺　明治十八年一月十九日

戸主身代限ノ節ハ土地建物幷記名アル公債證書ヲ除キ非戸主ノ所有ニ係ル動産物ハ總テ戸主財産ニ組込糶賣相成例規ニ有之候得共其内非戸主ノ所有タルヿ明確ナル分取除クヘキ義ニ候哉

前項若シ否ストナストキハ非戸主カ篤行寄特ノ行爲ニ據リ賜リタル金銀木杯等ハ如何處分致可然哉

指令　明治十八年二月十八日

伺ノ趣左ノ通　但主管ニ付當省ヨリ指令ス

第一項　公債證書地所ノ如キ成法上所有者ノ記名アルモノニ非ラサレハ取除ク可キ限リニアラス

第二項　賞賜ニ係ル金銀木杯等ハ差押フ可キ限リアラス

○出訴期限規則　明治六年十一月五日第三百六十二號布告

金穀貸借ヲ始トシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ル迄雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ候條約ヲ結ヒ置キタル一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所ヘ出訴致不苦ノ處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合セ候モノモ有之是又慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴候トモ勘辨ヲ加ヒ候トモ人民自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歳月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死去又ハ轉居又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定メ候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消タル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定候ニ付若シ出訴致度トモ取上ケ不致候事

出訴期限規則

第一條　一學藝ノ授業料　一旅籠料　一運送賃　一飲食料　一手附金

一商人互ノ賣掛金　一職人ノ手間代金

一日雇人ノ給料　一請負金

一芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等　一男女藝者ノ揚代金

右ハ六個月限

第二條　一醫師ノ診診及藥料
一授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
一商人ヨリ商人ニ非サル者ヘ賣掛代金
一一ケ年期マテノ奉公人給料
右ハ壹個年限

第三條　一期限ヲ定メタル貸附米金及利足アレハ其利息
一期限ヲ定メタル預米金及利息アレハ其利息
一家屋及土地ノ借賃　一小作米金
一證據金　一敷金
一物品ノ借賃又ハ損料　一養育料
一七ケ年期迄ノ奉公人給料　一期限ナキ年金及一生涯ノ年金
右ハ五箇年限

第四條　一條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヨリ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ不苦事

第五條　一從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又從前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一第二第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事、

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定ム所ノ規則ハ格別ナリトス

(丙)甲第二十號　明治六年六月十九日達　府縣

地所質入書入建物船舶書入質ノ公證ヲ受ケタルモノハ出訴期限無之旨今般太政官ノ裁令ヲ經候

●千葉縣ヨリ出訴期限ノ義ニ付司法省ヘ伺　明治十六年十月一日

町村會ニ於テ評決シタル費用ノ怠納アルトキハ土木費ヲ除ク外總テ其施行者ヨリ裁判所ヘ訴出スヘキ筈ニ候處右ハ貸借賣買等人民相互ノ取引トハ同シカラザルニ付出訴ノ期限無之義ト相心得可然哉此段相伺候也

指令　明治十六年十月十三日　伺之通

(司)第四十四號　明治九年四月達

區裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限滿期ノ者處置方左之通可相心得事

第一條　勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ滿期ニ至ル者ハ其勸解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ

第二條　勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ府縣裁判所ニ出訴ヲ爲サヽルニ於テハ其事件ニ付出訴スルノ權利ヲ抛棄シタルト看做スヘシ

（司）丁第九號　明治十一年三月十一日達

裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年タルヘシ

○負債者失踪後ノ訴訟　明治八年一月二十日第六號布告

民事裁判所負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改候事

第一條　債主定約期限未滿內ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツ可キ事

第二條　債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨屆出ヘキ事

第三條　前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戶長ヘ申付失踪ノ年月日ヲ訊問シタル上債主差出シタル證書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付遲テ本人見當ルカ又ハ二十六ケ月ノ滿月後跡相續ヲ爲スヘキ者ニ掛リ此裏書證書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條　債主ニ於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ケ月ノ時限ハ明治五年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限內ニハ加算致サヽル事　明治十四年十二月廿八日第八十三號布告

○治安裁判所及始審裁判所權限

治安裁判所及始審裁判所權左ノ通制定ス

第一條　治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニアラス

第二條　治安裁判所ハ請求ノ金額及價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條　治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノヲ裁判スルヿヲ得ス

第四條　治安裁判所ハ請求ノ金額及價額百圓以上並ニ第三條ニ揭ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條　治安裁判所ハ其管轄地內ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

●茨城縣ヨリ詞訟勸解ノ儀ニ付司法省ヘ伺　明治十六年十月二十三日

明治十四年第八十三號公布第一條ニ治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ストアレ𪜈個ハ是レ偏ニ治安裁判所ノ權限ヲ定メラレタルモノニシテ訴訟者ニ對スルノ命令ニアラサレハ勸解ハ仍ホ從前ノ通（明治九年御省甲第十七號諭達ニ遵フ）勸解ヲ經ルト經サルハ訴訟者ノ意中ニアルモノニシテ訴訟者カ勸解ヲ請フモ到底其効ナシト認ムルモノハ直ニ本訴ヲ起スモ固ヨリ若シカラサル筋ト相心得可然哉又其但書ニ諸官廳ニ對スル事件（中略）ハ勸解スルノ限ニ在スト有之官廳カ人民ニ對スルモ人民カ官廳ニ對スルモ訴訟ニ殊異ハアラサレ𪜈明治七年第廿四號御省達及ヒ八年甲第五號十四年甲第四號御省布達ニ依リ考フル𪜈ハ右ハ全ク字面ノ通人民カ官廳ニ對スル者ニ止リ官廳カ人民ニ對スルモノハ含蓄セサル義ト相心得可然哉

指令　明治十六年十一月十日

伺之趣前段人民相互ノ間ニ起ル訴訟ハ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ヲ除クノ外必ラス勸解ヲ經ヘキモノトス後段人民ヨリ官廳ニ對スルト官廳ヨリ人民ヘ係ルトニ拘ラス其事件ハ總テ勸解セサルモノトス

○控訴裁判所權限

明治　年　月　日第　號布告

治安裁判所及始審裁判所權限、伺指令、控訴裁判所權限

控訴裁判所ノ權限ハ許多ノ沿革ヲ經現今ニ至テハ左ノ二權限ニ過キス

第一　控訴裁判所ハ管轄内始審裁判所ノ始審ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス

第二　人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ヲ裁判ス

但院省府縣ニ對スル訴訟ハ司法卿ヘ奏請ノ上之ヲ受理ス

○大審院權限

明治　年　月　日第　號布告

第一條　大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所（編者云即控訴裁判所）以下ノ審判不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主持スル所トス

第二條　審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ依リ大審院自ラ之ヲ判決スル事ヲ得

第三條　已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判定ス

第四條　陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條（略之）

第六條　内外交渉民刑事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

第七條（略之）

（追加）人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ノ上告ハ司法卿ニ奏請ノ上之ヲ受理ス

（司）第二號　明治十四年十二月廿八日達

本年（十月）第五十三號布告ヲ以テ各裁判所ノ位置及管轄ノ區畫改正候ニ付テハ從前布達中上等裁判所トアルハ控訴裁判所地方裁判所トアルハ始審裁判所區裁判所トアルハ治安裁判所ト改マリ候義ト心得ヘシ

○利息制限法　明治十年九月十一日　第六十六號布告

第一條　凡ソ金銀貸借上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條　契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十（二割）百圓以上千圓以下百分ノ十五（一割五分）千圓以上百分ノ十二（一割二分）以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條　法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルトキ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ラス百分ノ六（六分）トス

第四條　第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アルトキ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條　返還期限ヲ違フルトキハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキヿヲ約定スルヿアルトキ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思料スルトキハ之ニ相當ノ減少ヲ爲スヿヲ得

●青森縣ヨリ利息制限法ノ義ニ付司法省ヘ伺　明治十年十一月十五日

本年第六十六號ヲ以テ利息制限法公布相成候處質物營業ノ義ハ免許鑑札ヲ與ヘ縣稅ヲ課スルヲ以テ通常金錢ノ貸借致スモノト同一視シ難ク候得共是又一種ノ商法ニシテ利息ハ則チ賣買利益同樣右制限法ニ關係無之モノニ候哉目今伺出ノ者有之候條至急御指令有之度相伺候也

指令　明治十年十一月三十日

伺之趣制限法ニ準據可致事

（司）丁第十八號　年　月　日布達

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書別紙ノ通相定ム

書記局其他掌務心得書

第一條　書記局諸般ノ事務ハ各員輪轉之ヲ執リ孫メ其主掌ヲ定メス

第二條　訟廷ノ取締被告人扣所ノ看守ハ巡査獄卒等ヲシテ之ヲ掌ラシム

第三條　訟廷口詰ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訟人呼入其他訟廷ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條　門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置ク片ハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニアラス

第五條　宿直ハ等外吏員雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番（退廳後ヲ云フ）判任官ニテ順次之ヲ務ムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニ非ス

（司）丁第二十一條　明治十八年十月二十四日布達

大審院幷裁判所ノ書類保存規程左ノ通相定ム

書類保存規程

第一條　勸解書類ノ保存期限ハ三年トス

第二條　動產其他ノ民事訴訟書類ノ保存期限ハ七年トス

第三條　不動產幷人事ニ關スル民事訴訟書類ノ保存期限ハ二十年トス但土地經界及水利ニ關スル必要ナル繪圖面等ハ永久之レヲ保存ス可シ

第四條　違警罪訴訟書類ノ保存期限ハ一年トス

第五條　輕罪訴訟書類ノ保存期限ハ六年トス

第六條　重罪訴訟書類ノ保存期限ハ二十年トス

第七條　第一條ノ期限ハ勸解落着ノ日ヨリ第二條以下ノ期限ハ裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第八條　刑事關席裁判ニ關スル訴訟書類ハ其期滿免除ニ至ルヲ以テ期限トス但期滿免除ニ至ラサル前其言渡確定シタル者ハ第四條以下ノ規則ニ從フ

第九條　被告人逃走等ニ係リ公判ニ付スル能ハサル事件ノ訴訟書類ハ第四條第五條第六條ニ定メタル期限間之ヲ保存スヘシ但其期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス

第十條　民事刑事ノ言渡書及命令書ハ永久之ヲ保存ス可シ

第十一條　受付遞付幷雜事ニ關スル簿冊類ノ保存期限ハ其記載ヲ終リタル日ヨリ二年トシ訴訟件名錄ハ永久之ヲ保存ス可シ

第十二條　表記ニ關スル簿冊類ノ保存期限ハ其製表ヲ終リタル日ヨリ三年トス但表記及已決犯罪表ハ永久之ヲ保存ス可シ

第十三條　書記局ニ於テ管掌スル金錢物品ニ關スル簿冊類ノ保存期限ハ其事柄ノ終リタル日ヨリ十年トス

第十四條　公文記錄敕典復權及處務手續其他決議ニ關スル簿冊ノ類ハ永久之ヲ保存ス可シ

第十五條　前數條ニ定ムル所ノ保存期限ヲ經過セシ書類ハ書記局ニ於テ審査シ目錄ヲ作リ

檢事ノ職務ニ關スル書類ハ檢事其他ノ書類ハ大審院長又ハ裁判長ノ檢閲ヲ經タル後細斷シテ之ヲ廢棄ス可シ但訴訟書類ノ副本ハ其正本現存セサル場合ヲ除クノ外保存期限ニ拘ハラス裁判確定ノ後直ニ之ヲ細斷ノ廢棄スヘシ

第十六條　此規則ハ大審院ハ其創設控訴裁判所ハ上等裁判所ト始審裁判所ハ地方裁判所ト稱セシ以後ノ書類ニ適用ス可キ者トス

○第拾二號　明治十八年五月廿九日布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス

但從前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セス

第一條　常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條　軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條　敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條　軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條　多衆ノ軍人常人鬪毆殺傷其他疑獄ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條　軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スヿヲ得ス

○裁判事務心得

明治八年六月八日第百三號布告

今般裁判事務心得左之通相定ム

第一條　各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヿヲ得ス

但刑事死罪終身懲役ハ此例ニ非ス

第二條　凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アルトキハ其裁判所ニテ辨解ヲ爲スヘカラス定期ニ

依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキ事ヲ言渡ス可シ

第三條　民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモノハ條理ヲ推考シテ裁判ス可シ

第四條　裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ定規トスルヿヲ得ス

第五條　頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヿヲ得ス

○行政裁判規則

明治七年九月
(司)第二十四號達

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟假規則

第一條　凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法省ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ

但闔區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做ヘシ

一院省使府縣所有ノ土地ニ關シタル事

一院省使府縣ノ會計及金銀貸借ニ關シタル事

一官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條　訴訟事件ニ付テ被告タル院省使府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ミ差出スヿヲ得ヘシ

其代人ノ外更ニ事件ノ證ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サヽルヲ得サルトキハ其本人ヲ呼出スコトモアルヘシ

但奏任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處ス

第三條　裁判上院省使府縣ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルトキハ其事由及裁判ノ見込ヲ具狀申稟スヘシ

若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還スヘキハ具狀申稟スルニ及ハスト雖トモ事情止ヲ得サル場合ニテ院省使府縣ヨリ償還セサルコトヲ得サルトキハ具狀申稟スルコト前項ニ同シ

但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ始審トシ更ニ控告スルヿヲ得ス

第四條　右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ帰スル者ト雖當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルトキハ先以テ之ヲ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フ可シ

一官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事

一道路ヲ作ルコトニ付一般ノ人民ニ關スル事

一工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事

一此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事
一行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事
但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

(司)甲第五號　明治八年五月廿九日達
各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理候事

(司)甲第四號　明治十四年八月五日達
從來人民ヨリ郡區長及ヒ戸長ノ職務上ニ對スル詞訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候事
但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來リ候振合ニ可準候事

(司)丁第九號　明治十四年八月五日達
人民ヨリ郡區戸長ニ對スル詞訟取扱方今般甲第四號ヲ以テ布達候ニ付テハ是迄上等裁判所幷大審院ヘ相達置候諸達書別紙六通回付候
別紙　第五號　明治九年一月二十二日達
人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付明治七年第二十四號ヲ以テ相達置候處右ハ行政司法

ノ裁判權限ニ於テ猶混淆ヲ免カレサル儀モ有之候ニ付追テ御規則相立候迄右ニ關スル訴訟ハ總テ本省ヘ伺出指令濟ノ上受理可致候

丁第二十四號　明治十一年六月二十九日布達
行政裁判云々ノ義本年五月八日丁第十三號ヲ以テ相達候處右ハ取消候條自今行政裁判ニ屬スル分ハ官府ヨリ儀還スヘキ條理アルト否トニ拘ラス總テ裁判見込案ヲ以テ具上申稟スヘキ義ト可心得事
但司法裁判ニ屬スル者ハ七年第廿四號當省達第三條ノ通タルヘキ事

各上等裁判所

番外達　明治十一年十一月六日
官廳ヲ相手取リ訴出ルモノハ從前政府トノミ相認ル節ハ官衙ヲ指定シ候樣可爲致事

各上等裁判所

番外達　明治十二年五月廿七日
人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付伺書差出候節該件訴狀或ハ判決案等正本一通差出候向有之候處自今都テ寫一通相添ヘ可屆出候事

各上等裁判所

丁第十五號　明治十二年六月十四日
人民ヨリ院省使等ニ係ル訴訟ニ付指令濟審理中解訟致候モノ又ハ司法裁判ニ飯シ官府ノ勝訴訟トナリシモノ有之節ハ其郡度可屆出事

但既ニ本文ノ件アリテ未タ屆出サルモノハ取纏メ屆出ヘシ

各上等裁判所

丁第十九號　明治十二年七月二十九日

人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ニシテ太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシムルモノハ自今本省ヨリ其旨ヲ附記シテ指令ニ及候條其裁判所ニ於テモ右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣（何某ヨリ何某ニ係ル何々ノ件ハ何年何月何日太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス）大審院ヘ通報ニ及置ヘシ

但本文ノ件ニ付テハ本人不服ヲ唱ヘ上告ノ屆ヲ差出スモ別ニ大審院ヘ書類遞送スルニ及ハス候事

（司）丁第十五號　明治十五年三月一日達

人民ヨリ郡區戸長ニ對スル詞訟取扱方ノ義ニ付昨明治十四年丁第九號達モ有之候處受否又ハ判決案伺出ノ際往々不都合ノ向モ有之候條右伺出ノ節ハ原被告ヨリ差出シタル訴答書ハ勿論一切ノ書類正本一通及謄寫ノ副本一通合セテ二通幷判決案モ正副二通相添ヘ可差出義ト可心得事

（司）丁第二十五號　明治十五年四月十四日

人民ヨリ郡區長ニ對スル詞訟取扱方ノ儀昨十四年丁第九號ヲ以テ相達候中明治十二年丁第十九號各上等裁判所ヘノ達ニ（前略）右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣（何某ヨリ何某ニ係ハル何々ノ件ハ何年何月何日太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス）大審院ヘ通報ニ及置クヘキ旨有之右ハ自今此達ニ照準シ管轄控訴裁判所ヘモ其都度無遺漏可及通達事

（司）丁第廿六號　明治十五年四月十四日達

別紙ノ通始審裁判所及始審裁判所ノ權限ヲ有スル治安裁判所ニ相達候條本人控訴ノ節ハ右ニテ受理不受理ノ義識別可致候事

別紙（即チ丁第二十五號ニシテ前ニ出スヲ以テ之ヲ略ス）

（司）丁第四十九號　明治十五年九月廿六日達

官府ヨリ人民ニ對スル詞訟ノ控訴受否伺ノ儀ニ付別紙ノ通名古屋控訴裁判所ヨリ伺出テ朱書ノ通及指令候

但本文達ト牴觸セル從前ノ指令內訓ハ取消ス

別紙

人民ヨリ院省府縣等ヲ控訴被告トシ覆審ヲ需ムル控訴受理不受理ハ伺ヲ經ヘキヤ否ヤノ義ニ付伺

人民ヨリ院省府縣ニ對スル訴訟ハ明治九年一月第五號御達ニ依リ總テ本省ヘ伺出御指令ヲ待テ受理致候義ハ勿論ニ候處爰ニ初發院省府縣等ヨリ人民ヲ被告トシテ始審裁判所ヘ起訴

シタル詞訟其始審裁判所ニ於テ之ヲ受理裁判シタル處該裁判ニ對シ不服ノ旨ヲ以テ人民（始審ノ被告ニシテ即チ始審裁判ノ曲者）ヨリ院省府縣（始審ノ原告ニシテ即チ始審裁判ノ直者）ヲ控訴被告ト爲シ控訴スルトキハ尚ホ前顯御達ニ準據シ經伺ノ上受理スベキモノニ可有之哉此段相伺候條至急仰御指令候也

名古屋控訴裁判所長
判事小畑美稻代理
判事　堤　正己

明治十五年八月廿九日
司法卿大木喬任殿

朱書

伺ノ趣經伺ニ及ハサル儀ト心得ヘシ

（司）丙第九號　明治十一年十月八日達　檢事ヘ達

民事審理及裁判宣告後該事件ニ付刑事ノ告ヲ爲シタル場合民事ノ審理ヲ中止シ又ハ罪證明白ナルトキハ裁判執行ヲ停止スヘキノ求ヲ爲スヘシ

但本文ニ抵觸スル從前ノ指令等ハ一切取消候義ト心得ヘシ

○證據物上諸達

明治七年七月七日（司）第十四號布達

聽訟上原被告ヨリ差出ス處ノ證據物ハ其裁判官見認メ有無且取捨ノ振合ニ因リ後來ノ裁判ニモ差響ク筋ニ付今後出訴ノ者之レアル時ハ事件採用不採用ヲ論セス其差出ス處ノ證據物本紙ニハ總テ年號月日番號ト（判事誰或ハ令參事誰）見認メタルヿヲモ記載シ押印可致事

（司）丁第二十五號　明治十三年十一月十一日達

本年當省丁第八號達左之通改正候事

明治七年第十四號ヲ以テ聽訟上原被告ヨリ差出ス所ノ證據物云々相違置候處公債證書地券等ハ記名檢印スヘキ義ニ無之候事

（司）丁第七號　明治十四年六月四日達

裁判上諸役所之帳簿入用ノ節ハ可成必用之分ヲ寫取候義ト相心得右寫本ニ正寫之證トシテ各役所之印ヲ捺シ差出シ候樣照會シ紙丁多數ヲ要スルトキハ其費用仕拂可申事

但可成寫本ニテ可取計筈ニ候ヘトモ裁判事件ニ依リ元帳ヲ要スル節ハ取寄方照會可致尤遠隔之地ニテ運送不便ナルトキハ其地最寄之裁判所ヘ右取寄方及調方共依賴可致事

府縣ヘ達

（司）丙第十一號　明治十四年六月四日達

詞訟審判上必要ニ付其廳並郡區役所及戶長役場所管ノ帳簿等寫取方各裁判所ヨリ及照會候節ハ右寫本ニ正寫ノ證トシテ該廳所之印ヲ捺シ同所ヘ差廻候樣可取計事

但寫本多數ニテ費用相掛候節ハ其照會ヲ廢シタル裁判所ヨリ仕拂候義ト相心得且詞訟事

件ニ依リ元帳ヲ要スルトキハ差廻方可取計此旨豫テ郡區役所及戸長役場ヘ相達可申事

（司）丙第一號　明治十七年五月三十日達

大審院、裁判所、警視廳、府縣（東京府ヲ除ク）憲兵本部

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル義ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得ヘシ

（甲號）裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ要書差押ヘタル節還附方ノ儀ニ付上申

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶賣買讓渡質入書入奥書割印簿等ヲ差押ヘ數十日間還付セサルヿアリ代ルニ戸長役場ニ於テ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ義消尽ニ據リ公證取消ノ義申出ル者アルモ本簿ヘ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿冊下戻方裁判所ヘ照會スルモ其事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落着迄還付シ難キ旨回答有之取扱上頗ル差支候趣ヲ以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而ノ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全體ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不尠就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ謄寫シ本書加除スルヲ得サル樣掛紙契印等ヲ爲シ而ノ簿冊ハ直ニ還付スヘク樣致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年一月二十九日　福井縣令石黒務

內務卿山縣有朋殿

司法卿山田顯義殿

（乙號）書面上申之趣聞屆候尤裁判所ニ於テ謄寫セシ該書ヘハ戸長之レニ調印スヘシ若シ其謄寫ニ拘ハル內ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ義ト可心得事

明治十七年五月二十八日

○預物處分規則

明治七年三月四日　第二十七號布告

預金穀ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候カ或ハ預リ中融通使用ナサヽルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月二日ヨリ以後ハ貸金同樣ニ裁判可致候事

○第十二號　明治十年一月二十九日布告

預ケ金穀ノ訴訟ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候カ或ハ預リ中融通使用ヲ爲サヽルノ明文アルモノハ年數ニ拘ハラス受理スヘキ成規ニ候處自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判ニ及ハス候事

○裁判所取締規則

明治七年五月廿日　（司）甲第九號達

〔證據物上證達〕〔預物處分規則〕〔裁判取締規則〕

第一條　訟庭ハ訴訟口詰必ス出席シ訴訟人ヲ順序ニ呼込裁判所ノ命ニ從ヒ失敬又ハ紛聞ノ事アラサル樣取締ヲ爲スヘキ事

第二條　原被告人ヲ始メ代言人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ從ヒ沈默整列シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲ爲スヘシ

第三條　原被告人共其事情ヲ余蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレハ更ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條　凡ソ進退動作ハ輕躁ニ渉ラス言語ハ憤怒高激ニ渉ラス諄々トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意ス可シ

第五條　前條ニ記載シタル事ヲ守ラス裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク者アル片ハ裁判官直ニ譴責ヲ加フヘシ

第六條　譴責ヲ加フヘキ者アル片ハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第七條　裁判官ヲ罵ル者アル片ハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科ス可キ事

第八條　裁判ノ時公聽ヲ許サレタル者ハ人々皆沈默敬聽スヘシ

但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛聞ニシテ審問ノ妨礙アリト思量スルトキハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

○勸解手續

明治　年　月　日　號

凡ソ勸解ハ其願意ニ隨ヒ證據物ノ有無ニ拘ハラス双方ノ私情ヲ酌量シ說諭ヲ加ヘ和解ニ至ラシムルヲ主トス故ニ其出願ノ手續ニ至リテモ亦簡便ヲ旨トシ假令無筆文盲ノ者タリトモ其情實ヲ陳述スルニ於テ差支ナキ樣ニナスヲ要ス故ニ其訴狀モ只半紙ヲ二ツ折ニシテ其前半面ニ出願ノ要領ヲ揭クルヲ以テ足レリトス今其例ヲ示サンニ貸金催促ノ如キニ於テ通常左ノ雛形ノ如ク認ムルモノナリ

元金何圓
年月日貸附
年月日貸附
利金何圓
合金何圓　請求高
貸金催促之勸解願

何(府縣)何(郡區)何(町村)何番地
(華士族平民)　原告　姓名印
(若代人ナレハ右ノ次ニ代人ノ往所身分ヲ書シ署名捺印スヘシ但本人ハ捺印スルニ及ハス)

何(府縣)何(郡區)何(町村)何番地

何年何月何日

（華士族平民）
被告　姓名　印

凡ソ勸解ヲ出願スルニ付テハ右ノ如ク其要領ヲ擧クルヿヲ要スレトモ若シ簡略ニ記載シ難キ訴訟例ヘハ地所堺界論ノ如キニ於テハ目安ト原被告人ノ氏名ヲ書スルヲ以テ足レリトス又勸解ヲ出願スルニ付テハ訴狀ハ通例一般ニ要スル者ナレモ若シ無筆文盲等ニテ認メ難キ時ハ治安裁判所ニ出頭シ其情實ヲ陳述スルヿヲ得可シ

勸解ヲ仰クニハ代人ヲ差出スヿヲ得ヘシト雖モ勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直ニ聞取ルニアラサレハ事情ヲ尽シ難ク隨テ說諭ノ上和解ニ至ルヘキ事柄モ却テ整ハサル樣ノヿアルカ故ニ可成丈本人自ラ出頭セサルヘカラス但シ本人疾病等不得已事故アル時ハ親族ノ内ヲ以テ代人トシテ出頭セシムルヿヲ得ヘシ斯ル時ニハ本人ヨリ代人願ト委任狀トヲ代人ニ渡サヽルヘカラス又勸解ニハ代言人ヲ用ユルヿヲ得ス代人トシテ差出ス事ヲ得ヘキノミナリ

代人願ノ書式

代人願

何（府縣）何（郡區）何（町村）何番地

身分（華士族或ハ平民）
氏名（委任ヲ受クル人ノ氏名ヲ書ス）

右ハ今般自分ヨリ何（府縣）何（郡區）何（町村）何番地（華士族平民）何之誰ヘ相係ル（本文ハ原告タルトキノ代人願ナルニ付被告タルトキハ「何府縣何郡區何町村何番地華士族或ハ平民何某ヨリ自分ヘ相係ル」ト書スヘシ）何々（訴名ヲ書クヘシ貸金催促ナレハ「貸金催促」ト書ス）之御解出願仕候ニ付テハ自分出願可仕之處病氣ニ付出願難仕候ニ付前書親戚何某ヲ代人ニ相頼度（若シ親族中代人ナキトキハ「出頭難仕之下ニ」且親戚中相當ノ代人モ無之ニ付前書何某ヲ代人ニ相頼度ト書スヘシ）然ル上ハ右同人ヨリ申上候事柄幷御請仕候事柄共後日ニ至リ自分ヨリ異議申上間敷候間何卒代人之義御許容相成度別紙診斷書相添此段奉願上候也

何（府縣）何（郡區）何（町村）何番地
族籍　△印
何之誰印　△（本人ノ名ヲ書スヘシ）

年　月　日

某治安裁判所長
判事補何某殿

右ノ代人願ニハ東京府下ニ於テハ區長或戸長ノ奥印ナクモ可ナレ𪜈他ノ府縣ニ於テハ之ヲ要スル者ナキニアラス注意スヘシ又委任狀書或ハ左ノ如シ(第五偏代理ノ部ヲ見合スヘシ)

委任狀

拙者義病氣ニ付何某ヲ以テ部理代人ト相定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事(委任スヘキ權限ヲ分項記載スヘシ例ヘハ貸金催促ノ原告タルトキハ「拙者ヨリ住所身分氏名ヘ相係ル貸金催促勘解願ニ付某裁判所ニ於テ辨論一切ノ事」ト書スヘシ若シ被告タルトキハ「住所身分氏名ヨリ相係ル貸金催促勘解願ニ付某裁判所ニ於テ答辨一切ノ事」ト書スヘシ)

右代理委任狀仍而如件

年月日　　住所族籍
姓　名　印

本人ヨリ委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代人願診斷書幷委任狀寫ヲ訴狀ニ添ヘテ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ

裁判所ニ於テ訴訟ヲ受理セラレタルトキハ被告人ヘノ呼出狀ヲ下ケ渡サルヽカ故ニ原告ハ被告ニ之ヲ送達スヘシ而シテ右呼出狀ニハ番號記載アレハ宜シク之ヲ留メ置クヘシ掛官ハ出訴ノ當日ヨリ定マルアリ或ハ其翌日定マルモアリテ各裁判所ニ依リテ其成規異ナレハ出頭スル者ハ其心得ニテ少ク注意スレハ直ニ之ヲ知ル事ヲ得ヘシ

凡ソ何レノ時ヲ問ハス裁判所ニ出ルニハ必ス名刺ヲ持參スベシ而シテ名刺ノ數ニ至リテハ東京府下僅々ノ裁判所スラ異同アルヲ免レサレハ況テ全國無數ノ裁判所ニ於テハ其數モ亦一定セサルヘシ茲ニ其大略ヲ擧ケンニ東京府下ニ於テハ概ヲ半紙二ツ切ニ認メタル名刺二枚ヲ要シ他府縣ニ於テハ半紙四ツ切ニ認メタル名刺一枚ヲ要スルヲ通例トナスカ如シ但シ名刺ノ認方ハ左之通

名刺雛形

何年第何號
御掛何某殿
何々ニ付出頭
年號月日時

(新ニ訴フル時ハ只新訴ト書ヘシ)
住所
身分
姓　名

已ニ勸解ノ日時定マリタルトキハ原被告各其當日ニ裁判所ニ出頭シ前ニ掲ケタル名刺ヲ裁判所ノ受付ニ差出シ置クヘシ若シ又被告トナリテ裁判所ヨリ召換ヲ受ケテ出頭シタルトキハ召

喚狀ヲモ名刺ニ副ヘテ差出スヘシ出頭ノ上ハ訴訟口請ノ呼込ニ應シテ訟庭ニ入ルヘシ又訟庭ニ入リタル上原被告裁判官ノ勸解說諭ニ依リ双方示談相整ヒ濟口トナリタルトキハ左ノ如キ書式ニ從テ其趣旨ヲ認メ差出スヘシ

第何號

御掛某殿

何郡區何町村何番地
身分
原告人　何　某

何郡區何町村何番地
身分
被告人　何　某

何々之勸解願濟口御屆

「此所ニ濟口ニ至リタル事由ヲ書スヘシ例スレハ貸金催促ナラハ請求高ノ內何圓ハ當日受取何圓ハ證文ニ直ス等其濟口トナリタル事由ヲ書スルコトナリ」

右私共ヨリ何々ノ義勸解奉願候處御說諭ニ基キ前書ノ通濟方相成候間此段御屆申上候以上

年號月日

右
原告人　何　某印
被告人　何　某印

某治安裁判所長
判事補何某殿

又金錢上ノ勸解願ニテ被告人ニ於テ身代限ヲ以テ濟方ヲナストキハ左ノ書式ニ從ヒ其事由ヲ認ムヘシ

第何號

身代限濟方對談書

御掛誰殿

一元金何圓
一利金何圓
合金何圓
內
一金何圓　御勸解中抵當家屋公賣代受取

差引

殘金何圓　滯金

私共貸金催促ノ義御勸解奉願候處御説諭ニ基キ被告人何某儀償却方相辨候處金圓調達兼候ニ付前書滯高身代限ヲ以テ濟方致候筈示談行屆候此上右御處分被成下度此段奉願候也

年號月日

何郡區何町村何番地
原告人　何ノ某印
肩書前同斷
被告人　何ノ某印

某治安裁判所長
判事補何某殿

右ヲ裁判所ヘ差出ストキハ區役所或ハ戸長役場ヘ宛テタル封書ヲ下附サルヽモノナリ此時左ノ如ク請書ヲ呈ス

何號

御請書

掛リ何某殿

一何區役所或ハ戸長役場ヘノ封書　壹通

右正ニ請取申候至急區役所ヘ差出可申候仍テ御請書如件

年月日

住所
氏名印

某治安裁判所長
判事補何某殿

右ノ手續ヲナシタル上財産調ヘモ濟ミ身代限處分揭示後六十日間ヲ過キ財産公賣ノ上原告人ニ於テ金圓ヲ受取リタルトキハ左ノ如キ書式ニ從ヒテ認メタル書面ヲ出スヘシ

御請書

一金何圓

右ハ何郡區町村ヘ係ル貸金催促ノ末身代限ヲ以テ濟方可仕旨原被連印ヲ以テ申上置本日財産公賣代金前書ノ金額御下渡シ相成正ニ受取申候仍テ御請書如件

年號月日

住所
原告人　氏名印

某治安裁判所長
判事補何某殿

若シ又被告ニ於テ原告ノ請求スル處ヲ拒ミ之ニ應セサルトキハ其勸解不調トナルナリ如此場合ニ於テ原告ニ於テハ裁判官ノ命ニ依リ或ハ證書ノ寫シ或ハ其請求趣意書ヲ差出シ不調籤ヲ乞ヒ受クヘシ不調籤ハ後日出訴ノ時ニ於テ用ユル者ナレハナリ

證書寫

何々（此處ニ證書ノ全文ヲ寫載ス）
右寫ノ通リニ相違無御坐候

年號月日

某治安裁判所長
判事補何某殿

住所
氏
名印

趣意書ノ認方ハ左ノ如シ

趣意書

自分ヨリ今般誰某ヘ掛リ何々ノ勸解出願仕候趣意ハ左ニ陳述可致（此處ニ勸解出願ノ趣旨ヲ書載スヘシ）
右之通ニ有之候也

年號月日

某治安裁判所長
判事補誰某殿

原告人　住所
氏
名印

右ノ證書ニ不調ノ付籤ヲナシ下付ナシタルキハ左ノ如ク認メタル受書ヲ差出スヘシ

不調籤御受書

何年何號
御掛何某殿

被告人　住所
身分
姓
名

右之者ニ相掛リ何々ノ儀御勸解願上候儀ニ付厚ク御説諭被成下候得共示談不行屆候ニ付其段證書寫御附紙ノ上御下ケ渡相成正ニ奉受取候仍テ御請書如件

年號月日

某區治安裁判所長

判事補何某殿

原告人　住所

姓　名印

右ニ述ヘタル處ハ出願ノ日ヨリ結局ニ至ルマテ故障ナク濟ミタル者ナレトモ或ハ被告人ノ不參シテ出庭セサル如キ事不少或ハ又假令被告トナルモ無余義事ニテ當日召喚ニ應シ難キヿアリ或ハ示談濟ロチナサンカ爲メニ猶豫ノ期限ヲ乞フヿアリ其他種々ノ故障生シ來ル者ナレトモ一々茲ニ掲載シ難ケレハ只其大体ニ基キ臨機應變之ニ當ランコトヲ希望スルノミ

今茲ニ其主タル者ヲ掲載セン

原告又ハ被告人ニ於テ不參或ハ遲參セントスル時ハ其趣ヲ出頭時刻前ニ願出可シ

遲刻(不參)御屆

番號

御掛リ何某殿

何郡區何町村何番地

原(被)告　何　某

右ハ何郡區町村番地何ノ誰ヘ掛ル(被告ナレハ「何ノ某ヨリ掛ル」ト書ス)何々ノ件ニ付本日出頭當日ニ付私儀例刻出頭可仕處何々(事故又ハ病氣ノ次第ヲ記ス)ニテ出頭

致兼候ニ付何日何時迄御猶豫被成下度此段奉願上候也

年號月日

某治安裁判所長

判事補何某殿

右　何之某印

又無屆ニテ不參シタル始末書ヲ差出ス時ハ左ノ書式ニ從フテ其旨ヲ認ム可シ

始末書

番號

掛何某殿

何宗

住所　身分

姓　名

本月何年何月

右何郡區町村番地身分姓名ヨリ係ル何々之件ニ付昨何日例刻出頭可仕之處何々ニテ(其事故ヲ書ス)無屆不參仕候段奉恐入候

右之通相違無之候也

年月日

某治安裁判所長

右　何之某印

【勧解手續書式】

判事補何某殿

又被告無屆ニテ不參シタルトキ原告人ニ於テ召喚願ヲ差出ス書式ハ左ノ如シ（引立願ヲ乞フ書式ハ次節ニ記シアルヲ以テ略ス）

被告御召喚願

番號
掛何某殿

住所　身分
被告　姓　名

右者本日御呼出（或ハ延期）當日不參仕候ニ付明何日本人御呼出被下度奉願上候也

何郡區町村番地
原告人　姓　名　印

年號月日
某治安裁判所長
判事補何某殿

又原被告示談行屆キ延期ヲ乞フ時ニハ左ノ書式ニ從ヒ其旨ヲ認ムヘシ

延期願

番號
掛何某殿

住所
原告　姓　名

住所
被告　姓　名

右何々（其訴名ヲ記ス）御勸解奉願候處今般双方示談行屆候間來ル何月何日迄其延期御猶豫被成下度此段奉願候也

年號月日

右　何之某印
右　何之某印

某治安裁判所長
判事補何某殿

凡ソ勸解ハ只一ノ說諭ニ止マル者ナレハ原被其說諭ニ從ハサレハ裁判所ニ於テハ强テ從ハシムル能ハス只不調トシテ斥クルニ止マルモノナリ此故ニ原被始メハ裁判官ノ說諭ニ從ヒ濟口ヲ契約シナキナカラ後日ニ至リ其濟口通リニナサントルモ裁判所ハ被告ニ迫テ濟口通リ執行セシムルノ權ナキ者ナリ

凡ソ裁判所ニ出ツルニハ必ス寶印ヲ携帶スヘシ是レ特ニ治安裁判所ノミニアラス何レノ裁判所ニ出ツルニモ必ス忘レサル樣注意スヘシ治安裁判所ニ出テ勸解ヲ受クルトキニハ證據

物アラハ悉ク携帶スヘシ提出シタル證書ニハ掛官ノ認印ヲ受ケ置ヘシ又治安裁判所ニ出ス書類ハ凡テ半紙ヲ以テスヘシ訴訟用罫紙ヲ用ユルニ及ハス是レハ勸解ニ於テ然ルモノニシテ治安裁判所ニ於テ始審ヲ受クルトキハ通常始審ノ裁判ト同シフナリ

勸解双方トモ必ス本人自ラ出頭スヘシ何トナレハ勸解ハ固ト說諭ノ上和解ヲ主トスル者ナレハ代人等ニテハ事情ヲ詳カニシカタク且ツ代人ニ於テハ利害ノ關係幷道德上良心ヲ責ムルノ感覺薄キ者ナレハ容易ニ說諭ニ從ヒ和解シカタキノ傾向アルヲ免レサレハナリ若シ不得已ノ事アルトキハ其代人トシテ親戚又ハ定マリタル雇人ヲ出スヘシ是レ等ハ由緣ナキ他人ヨリ大ニ勝ル所アレハナリ

勸解事件ニ付係リ官番號等定リタルトキハ宜シク記臆シ置クヘシ若シ然ラサルトキハ大ニ紛雜ヲ起スフアルヘシ又書面等ヲ差出スニハ必ス係官及番號ヲ記臆スヘキモノトス

召喚狀ヲ被告人ニ渡シタルトキハ必ス受取證ヲ取リ置クヘシ是亦後日被告ノ出頭セサル時之ヲ責ムルノ證憑トナス可キ者ナレハナリ然レトモ若シ召喚狀ヲ原告ニ渡サスシテ裁判所ヨリ直ニ被告人ヘ送附スルノ地方ニ在リテハ此限ニアラス

訴訟事件ハ必スシモ勸解ヲ經サレハ出訴スルヲ許サレサルニハアラス其事ハ前權限ノ部ニ揭載セリ

○始審手續

侵害セラレタル權利ヲ回復センカ爲メニ義務者ヲ治安裁判所ヘ訴ヘ勸解ヲ乞フトイヘトモ義務者不當ノ陳言ヲナシ頑乎トシテ我カ要求ヲ拒絕スルニ當リテハ權利者ハ亦勸解ニ依賴シテ其權利ヲ回復シ得ヘカラス必スヤ其他ニ救正ノ途ヲ求メサルヘカラス而シテ其途タル只之ヲ治安裁判所若ク始審裁判所ヘ訴ヘ出ルニ外ナラサルナリ而シテ治安裁判所ハ其權限タル甚タ狹マケレハ勸解不調トナリタル事件ニ付出訴スルモノアルトモ悉ク之ヲ受理スルヲ得ス唯金額百圓ニ滿タサル事件ヲ受理シテ裁判スルヲ得ルノミ始審裁判所ハ之ニ反シ金額百圓未滿ノ事件ヲ除キ其余ノ事件ヲ受理シテ裁判スルヿヲ得其詳細ナルハ載テ裁判所權限ノ部ニ在リ如此治安裁判所ト始審裁判所トハ其權限ヲ異ニスルニ拘ハラス勸解不調トナリタル事件ヲ受理シテ始テ審判ヲ爲スヿハ同一ナレハ共ニ之ヲ始審ト稱シ出訴ノ時ヨリ審判ノ日ニ至ルマテ其手續ハ全ク相同シ始審ノ出訴ヲナスニハ先ツ其出訴ノ趣意ヲ相當用紙ニ認メタル訴狀正副二冊若シ證據物アレハ其寫二冊ニ勸解不調籤ヲ添ヘ名刺ト共ニ裁判所ニ呈スヘシ

若シ代人ヲ以テ出訴スル時ハ前節ニ記載シタル委任狀寫ト代人願トヲ裁判所ニ捧呈スヘシ此ニ用ユル代人願ニハ區戸長ノ奥書ヲ要ス但其書式ハ勸解手續ノ代人願ト異ナルナシ

但シ代人ヨリハ左ノ上申書ヲ呈スヘシ

上申書

原告何ノ誰ヨリ被告何ノ誰ヘ係ル何々ノ訴訟受任ノ事件外ニ訴訟又ハ執行願等ニ至ル迄他ニ受任ノ事件無御座候

右上申仕候也

年號月日

何郡區町村何番地

所長宛

何之某印

訴狀ノ本副ニ奥書ノ上原告人ニ下ケ渡サレタルトキハ左ノ雛形ノ如キ受取書ヲ裁判所ニ呈スヘシ而シテ訴狀ハ原告ニ於テ被告方ヘ送達スヘシ

御請書

一冊

一奥書訴狀

右ハ何郡區町村番地何ノ誰ヘ係リ何々ノ件出訴仕候處前書ノ通奥書之上御下附相成正ニ奉受取候早速被告ヘ相渡シ受取書寫シ本日ヨリ一週間内ニ無相違捧呈可仕候仍而御受書如件

何區町村何番地

何某印

年號月日

所長宛

訴狀ヲ被告人ニ送達シタル片ハ左ノ雛形ノ如キ受取書ヲ取置ヘシ

何年何號

一奥書訴狀

右正ニ受取申候也

年號月日

何某殿

壹冊

何之誰印

被告ニ於テハ訴狀ヲ受取リタルヨリ一週間内ニ答書正副二通若シ證據物アレハ其寫本二冊ト共ニ之ヲ裁判所ニ差出スヘシ若シ代人ヲ用ユルヿアラハ前ノ雛形ニ準シテ之ヲ認メ裁判所ニ捧呈スヘシ

被告ニ於テ附シタル答辨書ヲ原告ニ於テ受取リタル上尚新タニ答辨スヘキ事項アラハ前同樣ノ手續ヲ以テ辨論書ヲ出スコトヲ得其後裁判所ニ於テハ日時ヲ定メ原被兩造對書ヲ開カル此時原被告共ニ出庭シテ充分ニ訴訟事件ヲ開陳シ訴狀ニ書キ盡セヌ事情ヲモ陳述スルヿヲ得ヘシ對審終リシ後原被兩造共ニ其事情ヲ書シテ亦余蘊ナク陳述スヘキ事項モナク提供

スヘキ證據モ全ク尽クルニ至ルトキハ之ヲ稱シテ結審ト云ヒ之ヨリ裁判言渡アルヘキナリ裁判言渡アリテ裁判狀ヲ下附サルヽトキハ左ノ如キ受書ヲ差出スヘシ

御受書

何年何號

裁判言渡書

右ハ御言渡ノ上御下附相成正ニ奉受取候也

年號月日

所長宛

原被告　何之某印

右

壹冊

以上述ヘタル處ニテ大略始審手續ハ盡キタル如クナレモ實際ハ中々如此無滯結局ニ至ルヿハ稀ナルモノナリ加之尙手續上必ス爲サヽルヲ得サルヿモ或ハ場合ニ於テ生スル事ナシトモ云フヘカラサレハ變ニ應スルノ手續ヲ茲ニ示スヘシ

被告タル者不參シテ召喚日ニ出庭セサルトキハ原告ニ於テハ何日ニ召喚アランヿヲ請フヿヲ得ヘシ其認方左ノ如シ

御召喚願

右ハ本日御召喚ノ處出庭不仕候自分繁忙ノ身ニシテ空シク時日ヲ費シ候テハ困難不少ニ付何日何時出庭可致樣御召喚被成下度此段奉願上候也

住所　身分

被告　姓　名

年號月日

所長宛

原告　住所　身分

姓　名　印

被告ニ於テ不參スルヿ屢々ニシテ三四回モ召喚ニ應セサル件ハ裁判所ニ請願シテ拘引スルヿヲ得ヘシ其書式左ノ如シ

御引立願

住所　身分

被告　姓　名

右ハ度々御召喚相成候得共每度不參致シ出庭不仕爲メニ訴訟事件モ延滯仕リ原告ニ於テ迷惑不少候被告ニ於テ出庭不致ハ畢竟訴訟ヲ延滯ナサシメ被告ノ權利ヲ蹂躪スルノ心意ニ出テタル者ト推察致候ヘハ此上幾度御召喚相成候トモ出庭不仕ハ必然ノ

コトヽ存候間何卒公力ヲ以テ速ニ御引立被成下度此段奉願候也

年號月日　　住所
所長宛　　原告　何之誰印

被告又ハ原告ニ於テ疾病等不得已事故アリテ出庭致シ難キ時ハ其前日若クハ當日早朝裁判所ニ申出猶豫願ヲ爲スヘシ其書式左ノ如シ

御猶豫願

御廳何年何號件ニ付本日御召喚ノ處何々(疾病等不得已事故ヲ書スヘシ)ニ付出頭難致候間來何日午前第何時迄御猶豫被成下度然ル上ハ右同日同刻必ス出頭可仕候間何卒御聞濟被成下度奉願候也

年月日　　住所
所長宛　　原(被)告　何ノ誰印

原被両造共ニ對審中ニ於テ發見シタル事故若クハ訴狀ニ洩レタル事等アラハ結審ニ至ルマテハ何時ニテモ書面若クハ口上ニテ申立ルヲ得ヘシ口上ニテ申述ヘントセハ尙ホ對審ヲ開カレンヿヲ請願スヘシ書面ニテ出スヿハ之ヲ辨論書トナシテ出スヘシ此等ノ書面ハ何レモ二通ヲ差出スヘシ而シテ文通用紙ニ認ムルモ相當用紙ニ認ムルモ呈供者ノ隨意ナリ

訴訟中被告ニ於テ訴訟ノ目的タル物件ヲ破壞隱匿若クハ他ニ運出セントスル恐レアルトキハ原告ハ其物件ノ差押ヲ裁判所ニ請求スルヲ得ヘシ又其訴訟ノ目的タル物件ハ被告ノ行爲ニシテ若シ被告ニ於テ依然其行爲ヲ繼續スルヿハ爲メニ原告ニ於テ損失ヲ受クヘキヿ明瞭ナル時ハ其行ノ爲停止ヲ裁判所ニ請願スルヲ得ヘシ又原告ノ請願ナシト雖裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ行フヘシ然レトモ審理ノ末原告ノ曲者ニ歸シタルトキ被告ノ損失ヲ償ハシメンカ爲メニ保證金トシテ當初原告ハ被告之請求又ハ裁判所ノ命令ニ從テ若干ノ金圓ヲ裁判所ニ預ケ置カサルヲ得ス然ラスンハ通常差押ヲ請願スルヿヲ得サルナリ此請願ハ裁判確定ニ至ル間ハ何時ニテモ爲スヿヲ得

○第十九號　明治十年二月十九日

明治八年五月第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九十三號布告控訴上告手續別冊ノ通改正ス

但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事

明治十五年四月第廿號
明治十二年十二月第四十號

大審院職制

〔大審院諸裁判所職制章程〕

長一人

一等判事ヲ以テ之ニ充ツ

院長ハ課ヲ分チ主任ヲ命シ隨時各庭ニ臨ミ民刑事件ヲ聽理スルヿヲ掌ル

但院長事故アルトキハ上席判事ヲ以テ代理セシムルヿヲ得

判事

第一 民事刑事ノ上告ヲ判理シ裁判ノ不法ナル者ヲ破毀シ及ヒ內外交涉ノ事件重大ナル者幷ニ判事ノ犯罪ヲ審判スルヿヲ掌ル

第二 死刑ノ案ヲ審閱スルヿヲ掌ル

屬

大審院章程

第一條 大審院ハ民事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ審判ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主持スルノ所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スル後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ大審院自ラ之ヲ判決スルヿヲ得

第三條 已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所亦大審院ノ旨ニ循ハサルトキハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ超ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條 各判事ノ犯罪其違警犯ヲ除クノ外大審院之ヲ審判ス

第六條 內外交涉民刑事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

第七條 各上等裁判所ヨリ送呈スル所ノ死刑案ヲ親閱シ批可シテ送還ス其否トスルモノハ更ニ律ヲ擬シテ還付ス

上等裁判所職制

長一人

勅任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分テ主任ヲ命シ隨時各庭ニ臨ミ民刑事件ヲ聽理スルヿヲ掌ル

判事

第一 管內ノ控訴ヲ受ケ之ヲ覆審スルヿヲ掌ル

第二 管內死罪ノ獄ヲ判決スルヿヲ掌ル

判事補

事ヲ判事ニ受ケ審判スルヿヲ掌ル

屬

上等裁判所章程

第一條　上等裁判所ハ地方裁判所ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス

第二條　地方官裁判所ヨリ具スル所ノ死罪ヲ判決シテ大審院ノ批可ヲ取リ然ル後原裁判所ニ付シテ宣告セシム

第三條　各地方裁判所ヨリ送呈スル所ノ終身懲役罪按ヲ審批ス

地方裁判所職制

長一人

奏任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分チ主任ヲ命スルヿヲ掌ル他ハ判事ニ同シ

判事

民事ヲ初審シ刑事懲役以下ヲ審判スルヿヲ掌ル

判事補

事ヲ判事ニ受ケ審判スルヿヲ掌ル

屬

地方裁判所章程

第一條　地方裁判所ハ一切ノ民事及刑事懲役以下ヲ審判ス

第二條　地方裁判所ニ於テ審判シタル民事ハ輕重トナク皆初審トス

第三條　民刑事ノ內外ニ交渉シタル者ハ其輕キハ直ニ之ヲ判決シ其重キハ一面之ヲ聽理シ一面之ヲ司法卿ニ具申スヘシ

第四條　死罪ハ審訊シテ文案證憑及擬律案ヲ具ヘ上等裁判所ニ遞送シ其行下ヲ得テ宣告ス

第五條　終身懲役ハ擬律案ヲ具ヘテ上等裁判所ノ審批ヲ取リ然ル後ニ宣告ス

控訴上告手續

第一章　控訴ノ事

第一條　凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ

第二條　控訴ハ民事ニ止リ刑事ニ及ハス

第三條　控訴ハ一タヒスルヿヲ得再ヒスルヿヲ得ス

第四條　地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ裁判言渡ノ翌日ヨリ起算ス裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ

至リ控訴スルヿヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヿヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヿヲ得

第五條　地方裁判ノ裁判言渡ヨリ二個月（三十日ヲ以テ一月トス）ヲ過ルトキハ控訴スルヿヲ許サス但地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ期限二個月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ增スヘシ

第六條　控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ屆出ヘシ但添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條　前條ノ屆ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルトキハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條　上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章　上告總則ノ事

第九條　各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條　上告スルヿヲ得ルノ事件ハ

第一　裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二　聽斷ノ定規ニ乖ク

第三　裁判法律ニ違フ

第十一條　大審院ハ上告ヲ受ルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥テ理セス

第十二條　陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヿヲ得

第十三條　凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヿヲ得ス

第三章　民事上告ノ事

第十四條　民事ノ上告スルヿヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條　上告ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヿヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ到ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ增ス此定期ヲ過レハ上告スルヿヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一　原告人ノ住所身分氏名

第二　代言人アレハ其住所身分氏名

第三　被告人ノ住所身分氏名

第四　證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五　地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡タル年月日

第六　上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出ス可シ

第一　地方裁判所ニ於テノ訴狀幷答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫

第二　上等裁判所ニ於テノ訴狀幷答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫

第三　上告狀中ニ證據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊トナシ又ハ數多ニ付編シテ幾冊トナシタル者

右ノ訴狀又ハ答書及證據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヿヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サヽルニ因リ上告人其寫シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條　上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預ヶヘシ若シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲナスヿヲ得ス

第一　若シ上告ヲ取上ケサルトキハ其預リ金ヲ沒入ス

第二　若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三　若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタル後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサルトキハ預リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シ被告人ノ費用ヲ償ハシム（被告人トハ上告者ノ相手人ヲ云）

第十七條　上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日內ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條　上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通知シテ（大審院ヨリ電信ヲ發ス）執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但內國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ內國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ止ムヘシ

第十九條　上告狀ハ原告自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代言人ヲシテ之ヲ捧クルモ本人ノ意ニ任ス

第廿條　大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第廿一條　判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタルトキハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第廿二條　被告人ハ呼出狀ヲ受取タルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ作リ自身又ハ代言人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ八里毎ニ一日ヲ增スヘシ

第廿三條　大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取シトキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ預定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第廿四條　原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件書類ヲ宣讀シ次ニ原被ノ陳述次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡ス可シ

第廿五條　若シ原告人ノ上告理ナシト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡ス可シ

第四章　刑事上告ノ事

第廿六條　違警罪及死刑ヲ除クノ外一切ノ刑事皆上告スルヿヲ得

第廿七條　刑事ニ付上告スルヿヲ得ヘキ人

第一　刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第二　檢事（檢事ナキ地方ハ警察官之ニ代ルヿヲ得）

第廿八條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サント欲スル時ハ其言渡ヨリ第三日迄ニ（三日間ハ決行スヿヲ）上告願狀ヲ其裁判所ニ捧ケ又第十日迄ニ上告趣旨明細書ヲ捧クヘシ

但シ裁判所ハ決放ヲ施行スル所ノ地方官ニ其事ヲ達スヘシ

第廿九條　檢事ノ上告セント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二十四時ノ內ニ上告ヲ爲スヿヲ刑ノ言渡シヲ受ケタル者ニ達シ又第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ作リ之ヲ司法卿ニ遞送スヘシ

但檢事ハ上告ヲ爲スヿヲ決放ヲ執行スル所ノ地方官ニ通知スヘシ

第三十條　檢事及刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ノ期ヲ過ルトキハ上告ノ權ヲ失フヘシ

第卅一條　決放ヲ執行スル所ノ地方官ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者若クハ檢事ヨリ上告スルヿヲ達シタルトキハ決行ヲ止メ以テ上告ノ落着ヲ待ヲ獄舍ニ於テハ其刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヲ別舍ニ勾置スヘシ（別舍ナキ者ハ便宜ニ從ヒ監護スルヿヲ要ス）

第卅二條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ上告狀ヲ書記スルヿ能ハサル時ハ代理人ノ獄中ニ延キ獄中ヲ劃テ應接所ヲ設ケ他ノ囚人ト混セサルヿヲ要ス上告趣意明細書ヲ代書セシムルヿヲ得其代理人ハ明細書ニ

本人ト共ニ姓名ヲ記スヘシ本人自ラ姓名ヲ記スルヿ能ハサル𪜈ハ其事ヲ肩書スヘシ

但代理人ヲ獄舍ニ延ク𪜈ハ之ヲ看守者ニ告ケ看守者ハ之ヲ裁判所ニ屆可シ

第卅三條　刑ノ言渡ヲ受タル者幼年（十五年未滿ヲ云フ）ニシテ上告ヲ爲スノ權利アルヿヲ知ラサル𪜈ハ其親族（五等親ヲ云フ）代リテ爲メニ上告スルヿヲ得

第卅四條　裁判所ニ於テ上告趣意明細書ヲ受取リタル𪜈ハ其文書類ヲ併セテ三日內ニ之ヲ大審院ニ遞送スヘシ

第卅五條　大審院ハ上告ヲ審按シ上告不當若クハ理ナシト決スル𪜈ハ理由ヲ付シタル判文ヲ原裁判所ニ發付シ上告人ニ傳達セシメテ後決行セシム上告理アリト決スル𪜈ハ原裁判ヲ破毀シテ更ニ他ノ裁判所ニ移シ若クハ大審院自ラ之ヲ審判スヘキ旨ヲ判シ若クハ單ヘニ其擬律ヲ平翻シテ原裁判ニ發付シ處分セシム其判文ハ並ニ理由ヲ付スヘシ

第卅六條　檢事上告スル𪜈ハ趣意明細書及其文書類ヲ直ニ司法卿ニ遞送シ司法卿ハ上告趣意書及其文書類ヲ相當ノ檢事ヲシテ之ヲ大審院ニ付セシメ大審院ニ於テ判文已ニ成ル𪜈ハ司法卿ヲ經由シテ原裁判所ニ付シ處行セシム

凡ソ控訴ヲ爲サントスル者ハ控訴ノ屆ヲ原裁判ニ差出スヘシ其書式左ニ掲ク

控訴御屆

御廳何年第何號件去ル何月何日ヲ以テ御言渡相成候處右ハ不當ノ御裁判ト思考仕候間今般控訴仕候間此段御屆仕候也

年　號　月　日

住所

何之誰印

某始審（或ハ治安）裁判所長

判事何某殿

凡ソ控訴裁判所ニ新訴スル𪜈ニハ常ニ所長ノ名宛ヲ以テスルト雖掛官ノ定マリタル後ハ必ス該官ノ名宛ニテ差出スヘシ

控訴裁判ノ判決ヲ不法若クハ不當トシ大審院ニ上告セントスル者ハ其旨ヲ原裁判所ニ屆出ヘシ其書式ハ前ニ掲ケタル控訴屆ト大同小異ナレハ茲ニ略ス

上告ヲナスニ要スル書類ハ已ニ記載シタルモノヽ外尙ホ上告屆ノ寫上告通知書ノ寫宿所屆ヲモ添テ呈スヘシ其外委任ヲ受ケタル代人ニ於テハ代人願委任狀ヲ添ヘテ差出スハ勿論ノ事ナリトス控訴ニ於ケルモ亦同シ

但上告通知書ノ書式ハ左ノ如シ

上告通知書

何裁判何年第何號何月何日ヲ以テ御裁判相成候處右ハ甚タ不當(或ハ不法)ノ御裁判ト思考仕候間今般大審院ニ上告仕候間此段及御通知候也

年　號　月　日　　住所

何某殿(相手方ノ姓名ヲ記ス)　　姓名印

大審院ハ事實ヲ復審スル處ニアラスシテ只裁判所ニ差出シタル書類幷ニ證據物ニツキ法律ノ當否ヲ裁判スル處ナレハ米タ原裁判ニ差出サヽル新タナル證憑ハ之ヲ提供スルヲ許サス故ニ證據物等ハ悉皆原裁判所ニ提供シ置キ其提供シタル證憑トシテ原裁判所ノ掛官ノ認印ヲ乞ヒ受置カサルヘカラス

○第二十一號　明治十五年四月日布告

明治十年二月第十九號布告上告手續第五條中三ケ月トアルハ總テ二ケ月ト改正ス

○第四十五號　明治十四年九月日布告

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴上告ヲ爲ス者アルトキハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ若シ豫納スルヿ能ハサルトキハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ許サス

○第二號　明治十八年一月六日布告

明治十四年(十二月)第七十四號布告ヲ發シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スヿヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條件ハ當分ノ內施行セス

第一條　控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタル者ト雖總テ本按ノ裁判言渡アリタル後ニアラサレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二條　控訴ノ期限內ハ控訴ヲ爲サスシテ直ニ上告ヲ爲スヿヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スヿヲ得ス

第三條　被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條　治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

警視廳府縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）

（内）甲第十三號　明治十八年四月廿四日布達

輕罪ニ係ル控訴ノ義ニ付本年第二號ヲ以テ公布相成候付テハ控訴裁判所管轄區域内各地方ヨリ控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判言渡アリタル地方ノ地方税ヲ以テ支辨シ其費用交付方等ハ客年當省乙第二十九號達ニ準據シ可取計候事

但控訴裁判後已決囚ニ屬スル諸費モ本文同樣可心得事

岐阜縣ヨリ輕罪控訴被告人押送費用ノ義ニ付内務省ヘ伺　明治十八年六月廿三日

輕罪ニ係ル控訴ノ義ニ付本年第二號ヲ以テ公布相成候ニ付テハ控訴裁判所管轄區域内ニ各地方ヨリ控訴ヲナシタル被告人ニ係ル拘禁中諸費支出ノ義ハ本年御省甲第十三號ヲ以テ御達相成候處右押送中費用ノ義ハ沿道府縣ノ警察費ヲ以テ支辨シ可然哉此段相伺候也

指令　明治十八年七月十日　書面伺ノ通

○訴訟人費償却規則

明治九年四月廿二日（司）甲第五號布達

第一條（民事訴訟印紙ノ部十七年司法省甲第一號告示ヲ參看スヘシ）

訴狀其外書類認料（一枚十六行十五字詰ニ付十錢但シ一枚以下モ同價）

右定限

第一　原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二　被告人ノ答書ノ正本副本

第三　訴訟又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四　審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五　訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被双方往復ノ文書

第二條　證人幷引合人（明治十二年十月廿七日司法省甲第二號布達ヲ以テ差添人ニ係ル件々一切刪除ス故ニ之ヲ除ク以下倣之）手當一日ニ付五十錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ增ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條　證人幷引合人　滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當一日ニ付五十錢（明治九年四月司法省甲第六號布達ヲ以テ本條幷ニ第六條ハ執行ヲ停止ス）

第四條　證人幷引合人　旅費滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但八里ヲ超ユレハ每滿一里ニ付十錢

右定限

第一　兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二　本條ハ日本國管内ヲ通行スル爲設ク

第五條　原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當　一日ニ付五拾錢

但八里以外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ增ス

右定限　第二條ニ同シ

第六條　原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中手當一日ニ付五十錢（第三條ノ割註ヲ參看スヘシ）

第七條　原告人又ハ被告人直ナル者旅費滿八里ニ付十錢歸路モ同斷但八里ヲ超ユレハ每滿一里ニ付十錢

右定限　第四條ニ同シ

第八條　通辨雇料　一日ニ付三圓

右定限　第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ

第九條　（民事訴訟用印紙ノ部十七年司法省ノ甲第一號告示參看）

翻譯料　（一枚ニ付十六行十五字詰二圓但一枚以下モ同價ノ事）

右定限　第一條ニ同シ

第十條　測量繪圖認料

右定限

第一　長三百間ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割　西ノ內一枚ニ付十錢

第二　長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割

西ノ內一枚ニ付十二錢

第三　長千二百間迄

百間ニ付三寸ノ割　同十四錢

第四　長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割　同十七錢

第五　長一万二千間迄

百間ニ付一寸ノ割　同二十錢

第六　長一万二千間以上

百間ニ付五分ノ割　同廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致スヘシ